

西表島世界遺産センター整備基本構想

令和4年2月

竹 富 町

目 次

1. 目的・条件	1
2. 基礎調査	2
1) 西表島の現況	2
2) 関連する取組・計画等	10
3) 先進事例等	14
4) 敷地の条件	37
3. 整備基本構想	41
1) 基本理念・基本方針	41
2) 施設整備方針	47
3) 事業スケジュール及び概算工事費	65
4) 管理運営方針	68

1. 目的・条件

【業務の目的】

西表島は奄美大島、徳之島、沖縄島北部と共に、その生物多様性が持つ顕著な普遍的価値が認められ、令和3年7月26日に世界自然遺産に登録された。そのため、本業務では、西表島における世界自然遺産の魅力を分かりやすく伝えること、また、その価値を保全するために継続・強化すべき管理上の課題や取組についての理解を深めること等、世界遺産センターとして必要とされる機能を確保するための拠点施設の整備に向けて、基本構想を策定することを目的とする。

【検討に当たっての前提条件】

西表島世界遺産センターの整備構想の検討は、世界遺産センターとしての機能確保を目的とするが、施設の位置及び形態に関しては、西表島大原地区への竹富町役場移転に伴う新庁舎建設に付随した整備が前提になる。現在、本構想と併行して大原庁舎等整備基本計画の検討が進められており、当該計画において世界遺産センターを含む関連施設に関する計画敷地のゾーニング方針が示されることから、世界遺産センターの建設予定地は当該計画での検討結果に基づいて設定されることとなる。

また、世界遺産センターと同様に大原庁舎等整備基本計画の関連施設と位置づけられている竹富町文化振興・観光交流拠点（博物館）に関しては、特に展示機能やサービス機能等において機能の集約・分担等を前提とした検討を行う必要がある。

さらに、環境省が整備・管理している西表野生生物保護センターは、西表島の野生生物に関する展示解説と調査研究及び国立公園の保全管理を主目的とする世界遺産センターと類似機能を有する既存施設であり、西表島東部に位置する古見地区に存在する。当該施設は、現在、展示の改修工事が進められており、今後は展示解説機能の強化が図られることから、本構想の検討に当たっては、当該施設の展示改修を前提として連携・機能分担の方針を検討する必要がある。

なお、西表島の世界自然遺産登録に当たっては、適正な観光管理が最大の課題とされており、竹富町観光案内人条例、西表島エコツアーリズム推進全体構想、持続可能な西表島のための来訪者管理計画、西表財団の設立、利用者負担制度の導入等、竹富町及び関係行政機関が連携して、これまで様々な取組を進めてきた経緯があり、こうした観光管理の仕組みや制度の導入・運用に必要な機能確保についても、世界遺産センター構想の検討条件となる。

2. 基礎調査

1) 西表島の現況

(1) 世界自然遺産の価値と西表島の特性・課題

西表島は沖縄県竹富町に位置する面積約 290 km²の島であり、主峰である古見岳（標高 470m）をはじめとする標高 400m 前後の壮年期地形から成り立っている。西表島の約 90%は森林（85%は国有林）であり、大部分は亜熱帯性の照葉樹林におおわれている。年平均降水量は 2236mm と豊富な雨量があり、相対湿度は約 79%と高く、高標高の森林では雲霧帯が形成されている。浦内川、仲間川等の河川が縦横に流れ、溪流や滝が散在しており、河口部の塩沼地には日本最大規模のマングローブ林が見られる。海岸部や周辺海域には自然海岸やリーフが発達したサンゴ礁が各所に見られる。このように西表島においては豊かな自然環境が美しい景観を織りなしており、全島がほぼ西表石垣国立公園に指定されている。

上記のような自然環境を背景として、西表島にはイリオモテヤマネコをはじめとして、ヤエヤマセマルハコガメ、キシノウエトカゲ、コガタハナサキガエルなど、多くの希少種、固有種、国際的な絶滅危惧種を含む多種多様な動植物が生息・生育している。西表島の成立過程でプレート運動や氷期―間氷期の海面変化によって周辺の陸地との連結と分断を繰り返してきたことや、地理的に黒潮や台風の経路、渡り鳥の移動経路に位置していることも、独自の進化を遂げた固有種や、移入経路の異なる様々な生物がみられる要因となっている。このような「生物多様性」の豊かさが評価され、令和 3 年 7 月には西表島が奄美大島、徳之島、沖縄島北部とともに世界自然遺産に登録された。

西表島の面積の 72%が世界遺産地域となっている。世界遺産としての顕著な普遍的価値を適切に保全していくことが求められており、奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島世界自然遺産の「包括的管理計画」や、「西表島行動計画」にも整理されているように、希少種の保全や外来種対策、自然環境への影響の少ない持続的観光の実現などに取り組んでいく必要がある。

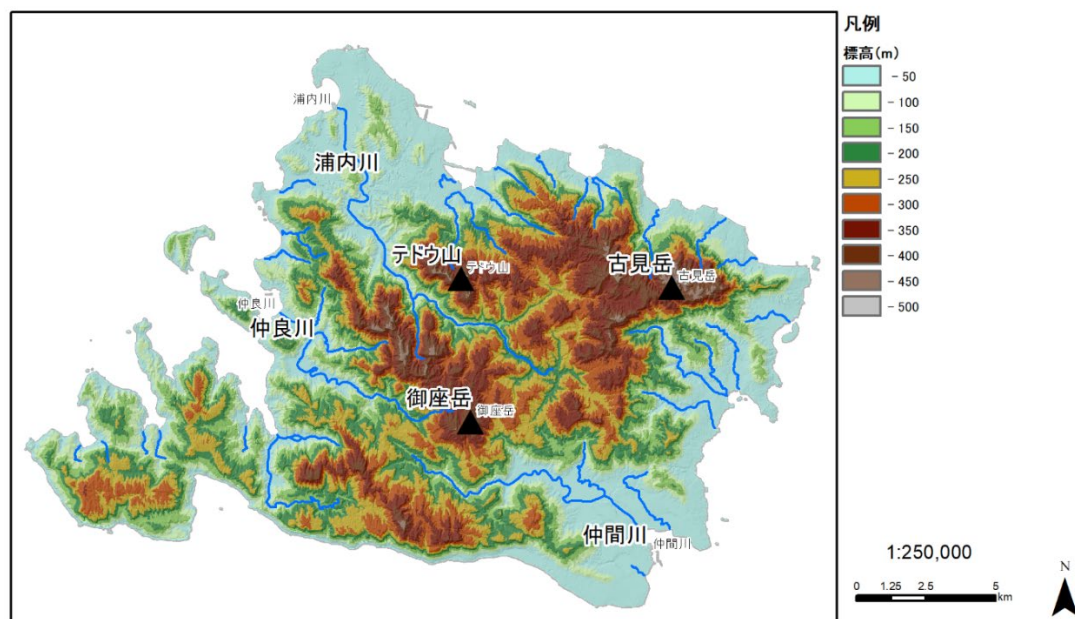


図 西表島の標高区分

出典：基盤地図情報標高データ（国土地理院）

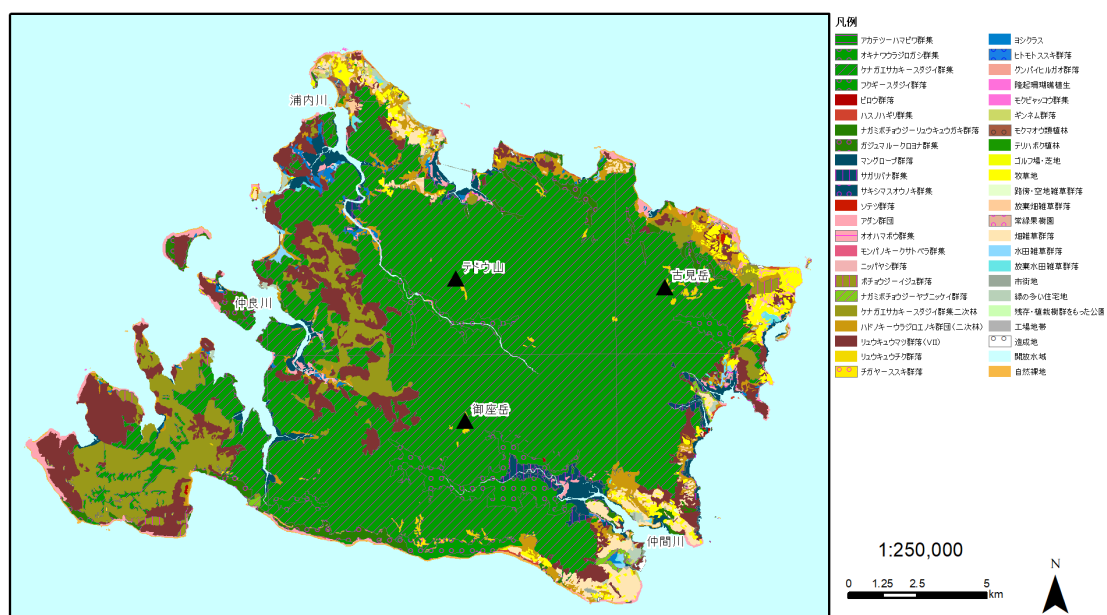
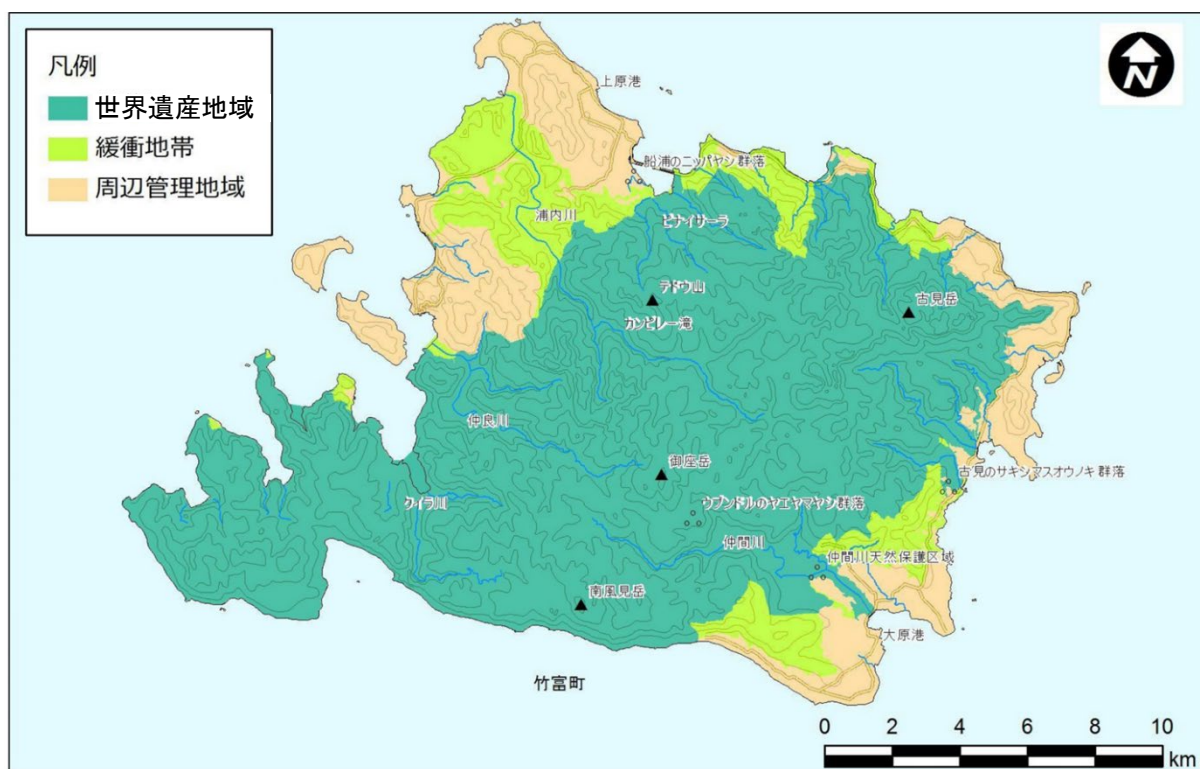
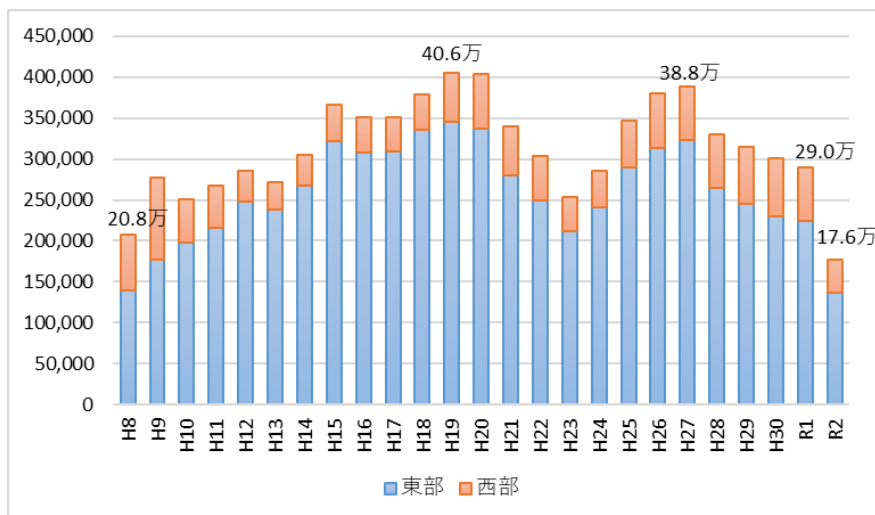


図 西表島の現存植生 出典：第6回・第7回自然環境保全基礎調査
現存植生図（環境省）



(2) 西表島における観光の現状と課題

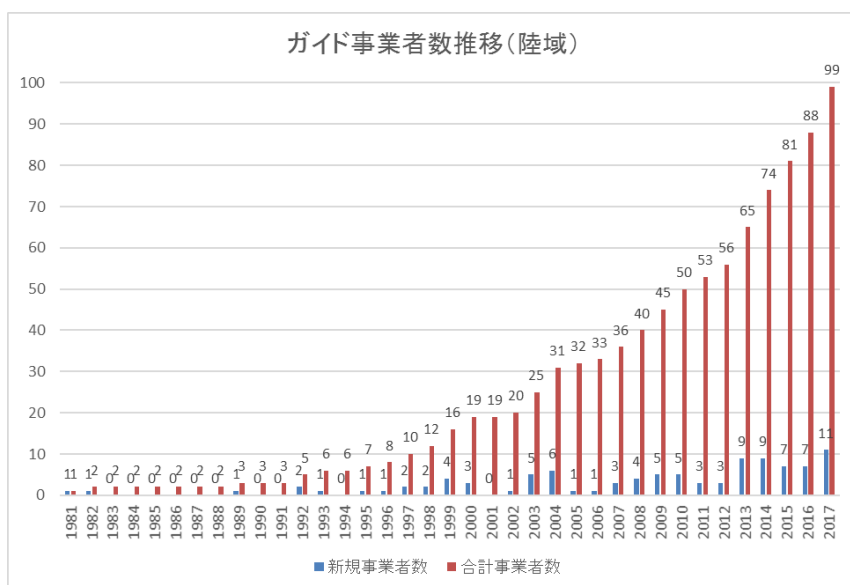
西表島においては、主に豊かな自然を活かした観光産業が盛んに行われている。西表島への入域観光客数は、平成19年の約40万人をピークとしてその後は急な増減を繰り返しているが、近年では約30万人程度である。令和2年度においては、新型コロナウイルス感染症の影響を受け176,265人とどまった。



図－西表島における年間入域観光客数の推移

出典：竹富町統計情報

観光の形態は、大型バスや動力船等で比較的大きなフィールドを利用する周遊型観光と、カヌーやトレッキング、海域でのアクティビティといった自然体験型観光（ガイドやインストラクターを伴う場合が多い）の大きく2種類に分けられる。近年の動向としては、周遊型観光はやや減少傾向にあるのに対し、自然体験型観光の増加が顕著であり、連動してガイド事業者数も急激に増加している。石垣島から日帰りで訪れる観光旅行者が多く、西表島での宿泊率は約22%（平成27年度）にとどまっている。



出典：「平成25年度西表石垣国立公園における登山道適正利用推進業務報告書」（平成26年3月、環境省那覇自然環境事務所）及び西表島エコツーリズム協会による調査結果

西表島において観光に利用されるフィールドは、遺産地域内外に散在している。遺産地域内の利用として、周遊型観光では仲間川及び浦内側のマングローブ林における動力船利用がみられる自然体験型観光では、ヒナイ川（ピナイサーラの滝）、古見岳、横断道といった遺産地域内の多くのフィールドが利用されている。入域観光客のうち、遺産地域内を利用するのは7割程度であり、その利用者のうち65%が周遊型観光、35%が自然体験型観光による利用となっている。

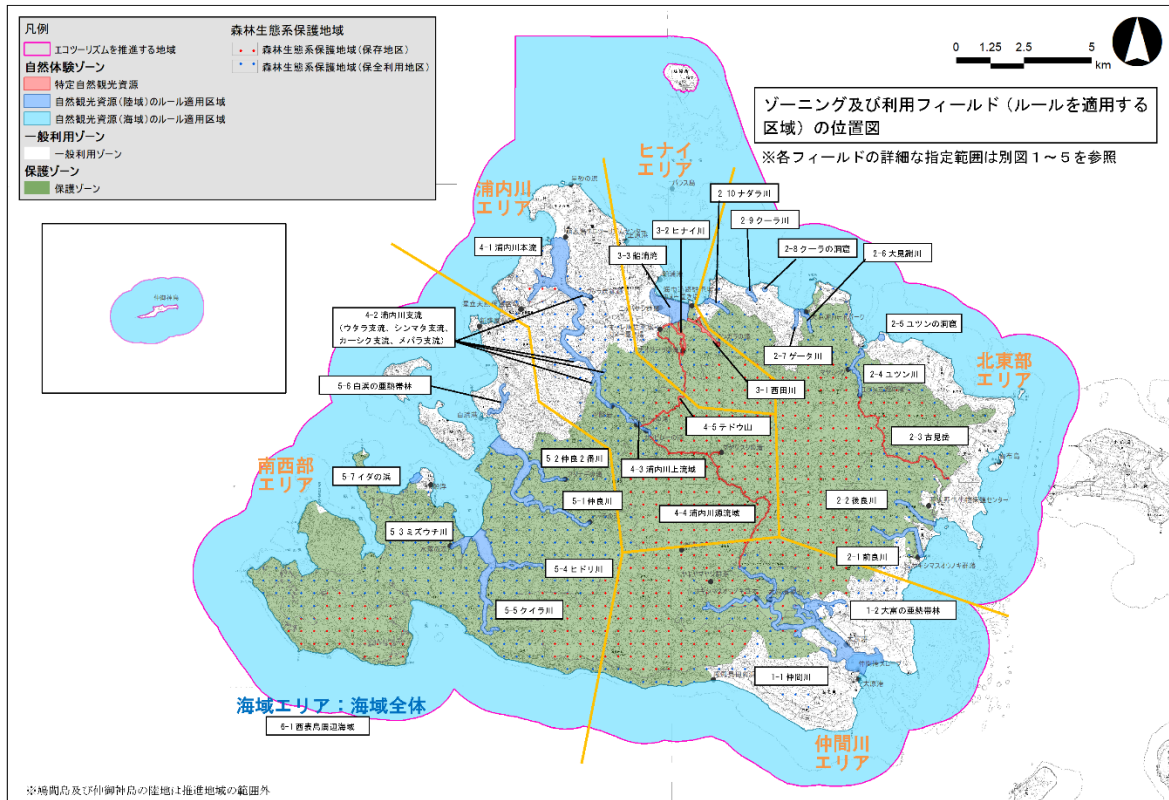


図 西表島における利用フィールド
（図中の「保護ゾーン」がほぼ世界遺産区域に該当）

出典：西表島エコツーリズム推進全体構想（案）

(3) 西表島における地域社会の特性と課題

西表島の人口は令和3年12月末時点で2414人である。東部地区に5つ、西部地区に9つの集落があり、人口内訳は西部地区が1501人、東部地区が931人となっている。

西部地区は、移住ブーム後の平成19年に一度人口が減少するものの、一貫して増加傾向にあり、竹富町の人口予測によると今後も増加傾向が予想されている。一方で東部地区は、平成18年の952人をピークに一度減少し、平成23年からはほぼ横ばいで推移している。

西表島を含む竹富町では、平成27年度における第1次産業の就業者数が332人、第2次産業の就業者数が121人、第3次産業の就業者数が2,103人となっており、第3次産業が8割以上を占めている。第1次産業のなかでは農業の就業者数が多く、東部地区ではサトウキビ栽培、西部地区ではパイン等の果実の栽培が特に盛んである。

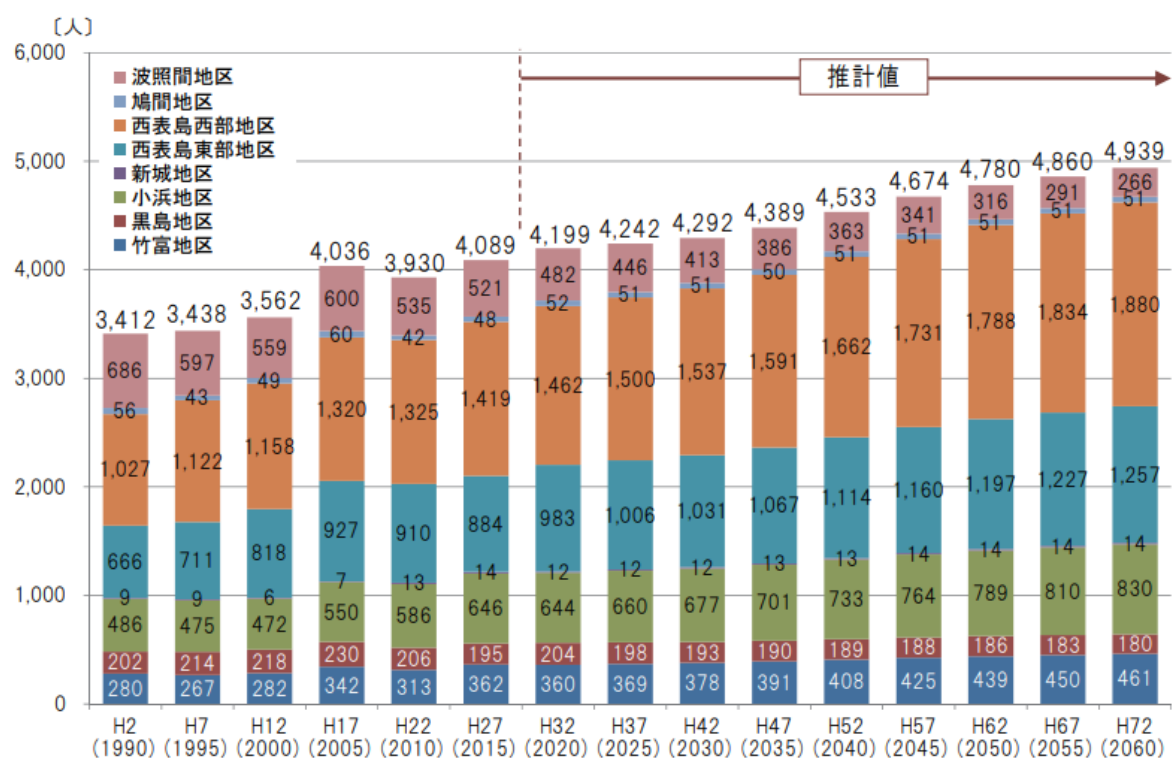


図 島別人口推移及び推計

出典：「竹富町人口ビジョン」

西表島へのアクセスは、主に石垣港を起点とした船によるものとなっている。西表島には東部の大原集落に大原港（仲間港）、西部の上原集落に上原港（船浦港）があり、この二つの港が西表島の玄関口である。平成30年における西表島の港船舶乗降人数は、東部の大原港（仲間港）で乗込263,591人、上陸322,916人、西部の上原港（船浦港）で乗込103,880人、上陸112,457人であった。

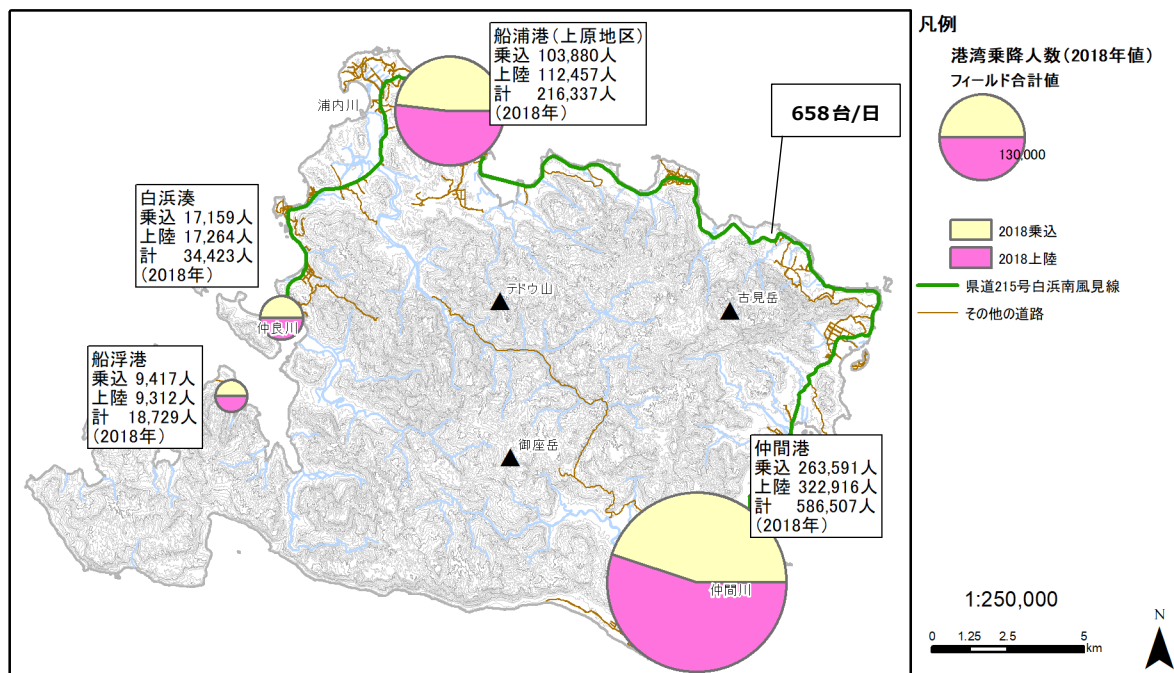


図 港・道路の利用状況

出典：

【道路交通量】平成27年度道路交通センサス（国土交通省）2015.11.25 観測データ

【港湾上陸人数】港湾統計 船舶乗降人員数（国土交通省）

（４）西表島における遺産管理への取組状況

西表島における世界自然遺産の管理、特に要請事項でも指摘された観光管理の課題に関連して、様々な取組が行われている。

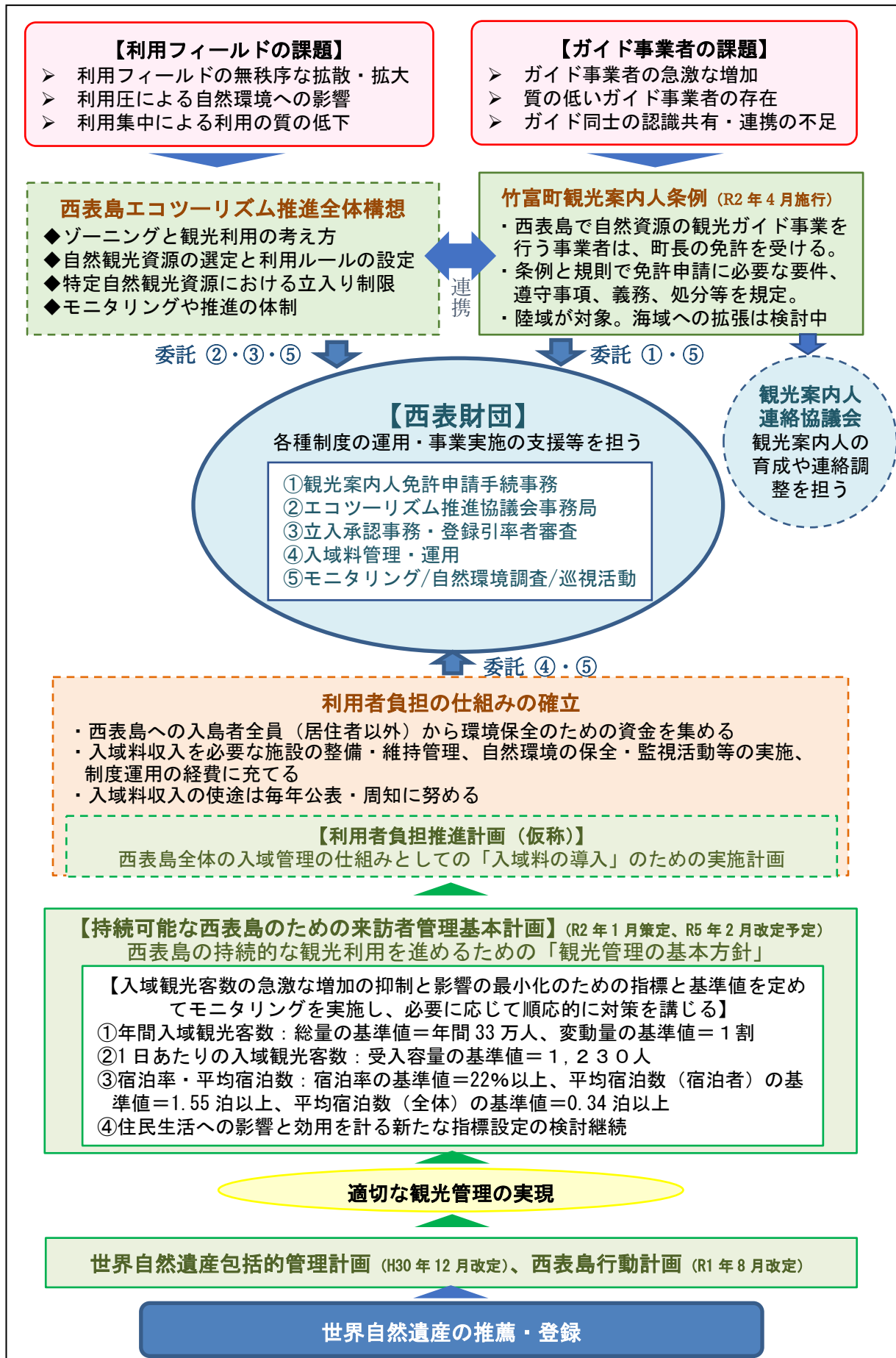
西表島全体での観光利用の管理としては、令和2年1月に策定された「持続可能な西表島のための来訪者管理基本計画」において、入域観光客数の急激な増加を抑制するとともに観光に伴う影響を最小化するため、受入容量や影響に関する指標と基準値（年間及び1日あたりの入域観光客数の基準値等）を定め、モニタリングを実施しながら順応的に対策を講じていくこととし、それらを実現していくための基本方針や取組についても記載されています。

島内の遺産地域等における自然体験型観光については、ガイド事業者の質の確保といった課題に対し、地域に根差した質の高いガイドを確保するため、令和2年4月に竹富町観光案内人条例が施行されている。この条例により、西表島等で活動する自然観光ガイド事業は免許制とされ、観光ガイドの質の向上やルール遵守の徹底に向けた取組が進みつつある。利用フィールドの過剰利用や無秩序な拡散といった課題に対しては、西表島エコツーリズム推進全体構想を策定し国の認定を得ることによって、ゾーニングを行って利用可能なフィールドを定め、利用に当たってのルールを設定し、特に自然環境の豊かなフィールドや影響が懸念されるフィールドについては特定自然観光資源に指定して立入制限の仕組みを導入することが検討されており、現在全体構想の認定に向けた国との協議が進められている。

また、遺産・観光管理の取組にかかる資金を確保するため、西表島を訪問する観光利用者から入域料などとして資金を集める仕組みについても検討が進められている。

令和3年11月には、西表島における遺産管理や観光管理を含む様々な課題に対して島民が中心となって取り組んでいく体制を確保するため一般財団法人「西表財団」が設立された。この西表財団には、上記の様な遺産・観光管理の取組や関連する各種制度の運用支援を継続的に行っていく主体となることが期待されている。

西表島の観光管理に関する枠組み



※破線は未策定の計画や未設立の組織を示す。

2) 関連する取組・計画等

(1) 竹富町大原庁舎整備に関する計画

現在、本構想と併行して検討が進められている大原庁舎等整備基本計画においては、庁舎・出先機関・救命救急士詰所・コロナ疑似症患者待機施設の4つの施設を「庁舎系施設」として現在の離島振興総合センターがある県道南側の敷地に集約配置し、世界遺産センターを含む博物館・島民ホール・図書館の4つの施設を「魅力発信・生涯学習施設」として、現在未利用の県道北側の敷地に配置するという計画敷地のゾーニング方針が示された。

したがって、本構想では、上記のゾーニング方針に基づき、世界遺産センターの建設用定地を大原地区町有地の県道北側の敷地内とし、同一敷地内に博物館・島民ホール・図書館の他の3施設が複合的に配置することを前提条件として検討を進めることとする。

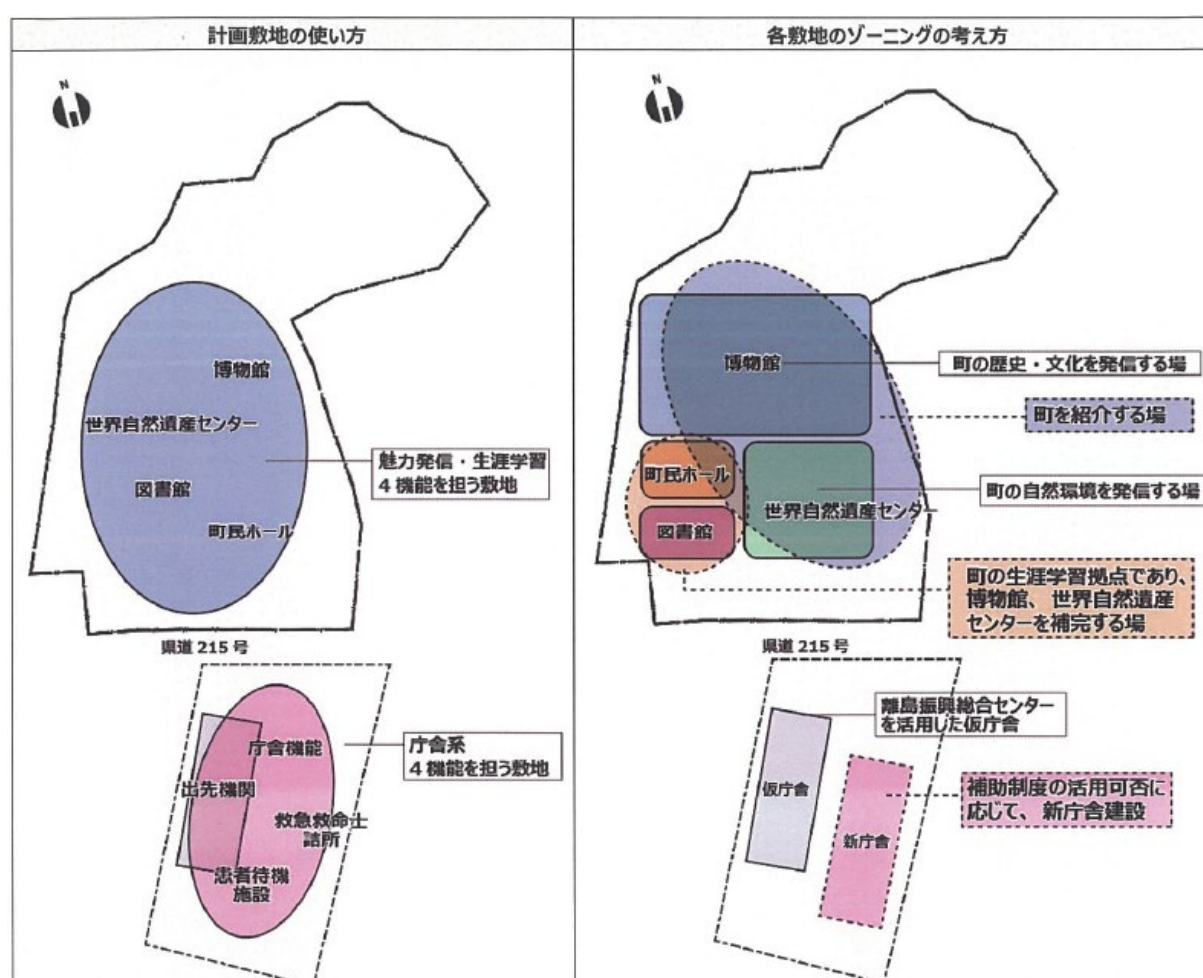


図 大原庁舎等整備基本計画における計画敷地とゾーニングの考え方の案

※出典：令和3年12月23日 第17回検討委員会資料

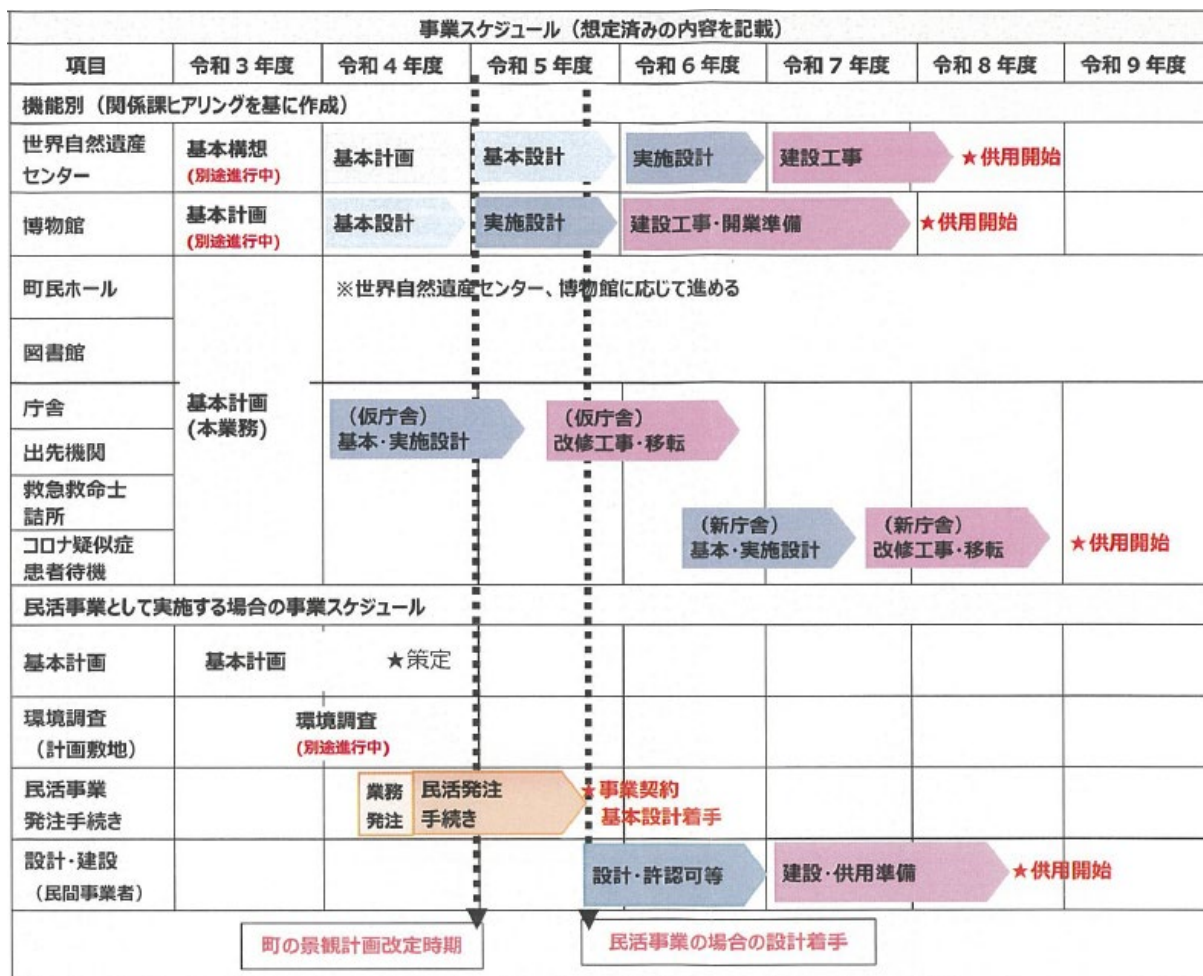


図 大原庁舎等整備基本計画における事業スケジュールの案

※出典：令和3年12月23日 第17回検討委員会資料

(2) 竹富町文化振興・観光交流拠点に関する計画

西表島世界遺産センターと重複あるいは親和性のある事業が行われることが想定されるため、本構想においては、竹富町文化振興・観光交流拠点との役割分担や機能連携の可能性について十分に検討していく必要がある。

百年後も竹富町らしく存続していく ための「知」と「交流」の拠点

ナイン・アイランズ ミュージアム Nine Islands Museum

ナイン・アイランズ ミュージアムのネットワーク 概念図

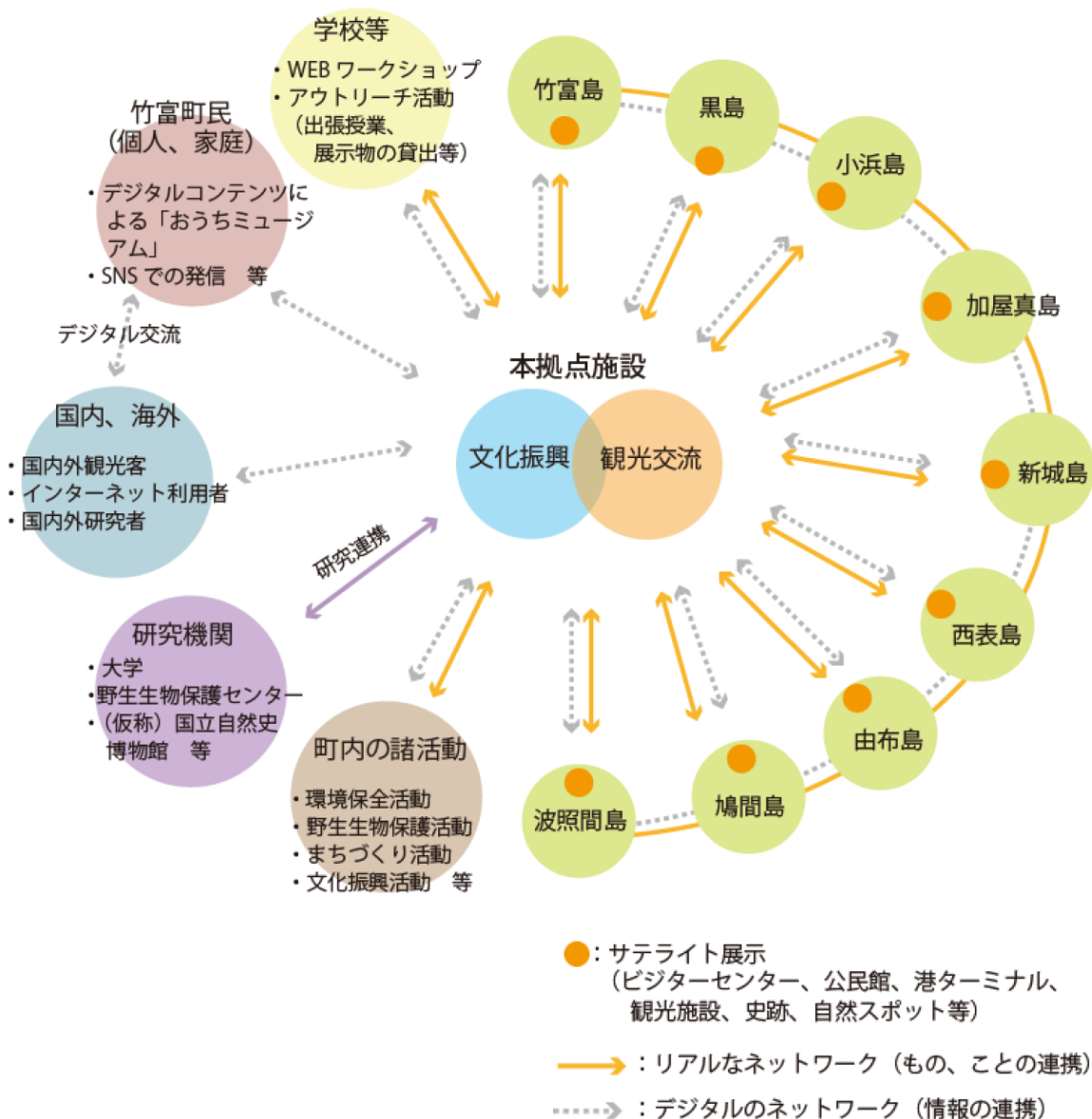


図 竹富町文化振興・観光交流拠点基本計画における基本理念

※出典：令和3年12月7日 竹富町文化振興・観光交流拠点基本計画書（案）

基本構想における事業活動	竹富町民	学校団体	修学旅行生	国内外観光客 観光事業者	歴史ファン、 竹富町ファン	有識者・研究者	重視すべきポイント
(1) 収集保存 ・竹富町の歴史・文化・自然に関する資料 ・資料の保存・管理 ・資料の修復 ・資料のデータベース化等	・竹富町の歴史、文化、自然の理解に重要な資料、記憶の収集と保存 ・収集した資料、記憶の系統だった保存と管理 ・収集した資料の材質、状態、形状等をふまえた適切な保存と管理、必要に応じた適切な修復 ・収集した資料、記憶のデータベース（台帳に相当）構築、外部公開も可能なシステム構築 ・資料収集方針確定（収蔵計画、寄託・寄贈の基準確定等）等				太枠：第2回 委員会の協議事項	・収集方針・基準提言 ・収集委員会	①全利用者層への活動のベースとなる。 ②開館に向けた資料等の収集を早急に推進する。 ③資料の収集、収集する資料の保存環境整備の方針等、将来に向けた諸方針を明確に定める。
(2) 調査研究 ・竹富町の歴史・文化・自然に関する調査研究 ・博物館活動の調査・研究 ・収蔵資料の活用 ・調査研究の連携 ・研究成果の発信等	・竹富町の歴史・文化・自然に関する調査研究 ・収集する資料、記憶に関する調査研究 ・資料、記憶を事業活動に活かすための博物館活動の調査研究 ・研究成果の発信 等		・修学旅行・観光動向に関する情報収集			・資料・文献等のレファレンス ・共同研究	①持続的・発展的な活動のベースとなる。 ②資料等に関する調査研究の推進のほか、連携を促進するための活動も展開する。 ③学術的調査研究のほか、集客等に関するマーケティング的な調査研究も展開する。
(3) 展示 ・観光案内 ・常設展示 ・企画展示 ・体験展示、子ども向け展示 ・サテライト展示等	・竹富町の総合的理解、個性の理解につながる展示 ・デジタルによる広がりや繋がりを生み出す展示 ・未来につながる展示（体験・子ども向け展示） ・各島の理解と交流促進につながる展示 （サテライト展示） ・企画展示	・竹富町に関するわかりやすい展示 ・竹富町の特性や個性の理解につながる展示 ・短時間で回れる見学動線 ・エンターテインメント性のある展示	・事前理解・補足解説用アプリ ・多言語解説	・町民が語る島々の記憶のストーリー ・より深い情報、風景等の紹介	・調査研究成果の公開（最新の研究成果の展示） ・企画展示 ・企画展等監修協力		①町民に対しては総合的かつ各島の個性の理解促進、さらに交流を促進する展示を行う。 ②修学旅行生や観光客に向けては、わかりやすさ、短時間で理解と満足感につながる動線、エンターテインメント性を重視する。 ③ファンや持続的関係性構築に向け、記憶や風景などのより深い魅力・情報の発信を重視する。
(4) 教育普及 ・町民対象の教育普及事業 ・観光事業者、ツアーガイド対象の教育、研修 ・子どもたちへの教育支援 ・学習プログラムの開発 ・文化活動の促進等	・竹富町の歴史・文化・自然に関する講座・講演 ・リモートセミナー ・フィールド学習プログラム（全島ツアープログラム、竹富町発見プログラム等） ・文化活動への拠点施設空間等の貸出 ・博物館活動への参加機会創出	・体験型ワークショップや歴史講座 ・出前講座、展示ユニット、教材貸出 ・事前学習ツール	・事前学習ツール ・フィールド学習プログラム（修学旅行生用） ・教師用マニュアルガイド	・フィールド学習プログラム（全島ツアープログラム、竹富町発見プログラム等） ・観光事業者、ツアーガイドを対象とした教育、研修	・竹富町の歴史・文化・自然の講座・講演 ・体験型ワークショップや歴史講座 ・フィールド学習プログラム（全島ツアープログラム、竹富町発見プログラム等）	・セミナー講師 ・プログラム監修	①竹富町の歴史・文化・自然に関する情報の発信・共有はベースとなるものとし、町民、学校、修学旅行生、観光客など、利用者に応じてアレンジし、適切な媒体や機会を設定して実践する。 ②デジタルを活用し、距離を問わない活動展開及び事前事後のフォローアップを行うことで理解度と満足度の向上に努める。 ③町民及び観光客等を対象に、リアルとバーチャルで9島をつなぐ活動を積極的に推進する。 ④外部連携体制強化を重視する。
(5) 交流・観光 ・インフォメーション ・施設情報の提供 ・交流・観光催事の実施 ・軽飲食、物販 ・観光回遊の促進等	・伝統文化体験イベント（町民交流・文化継承催事） ・観光回遊プログラムの推進（普及/再掲） ・町民、子どもたちによるマナーづくりと発信 ・飲食・物販 ・施設情報、活動情報の発信、共有 ・広報活動（SNS、プロモーション等）	・観光案内（インフォメーション） ・伝統文化体験イベント（交流・観光催事） ・観光回遊プログラムの推進					①町民（学校含）と島外来訪者に対しては活動内容をアレンジする。町民にはより持続的に継承につながる活動、島外来訪者へは参加しやすく満足度・持続的関係性につながる内容とする。 ②各島をつなぐ活動及び国内外の未・来訪者との良好な関係性構築のため、広報を重視する。 ③観光マナーづくりを町民参加のプロジェクトとして展開し、町民と観光客とのコミュニケーション促進につなげる。 ④デジタルコンテンツを有効活用して持続的な関係性構築につなげる仕組みを整える。 ⑤博物館活動を支える連携体制の構築とともに、継続的な集客につながる代理店対応を丁寧かつ持続的に展開する。
(6) 情報発信 ・デジタルコンテンツ（おうちミュージアム）開発 ・双方向コミュニケーションの創造 ・ビッグデータの活用等	・デジタルコンテンツ（おうちミュージアム）開発 ・WEBワークショップ ・ビッグデータ活用		・おうちミュージアムによるフォローアップ	・メンバーシップ ・SNSによる情報拡散	・データベース公開		
(7) 連携構築 ・町民、地域団体等との連携 ・研究機関との連携 ・関連施設との連携 ・民間施設や事業者との連携	・サポーターシステム、ボランティア	・旅行代理店レクチャー・モニターツアー ・滞在型観光メニュー開発			・メンバーシップ ・SNSによる情報拡散	・共同研究	

図 竹富町文化振興・観光交流拠点の事業活動及び重視するポイント

※出典：令和3年12月7日 竹富町文化振興・観光交流拠点基本計画書（案）

3) 先進事例等

(1) 国内先進事例（遺産センター）

① 知床世界自然遺産センター

環境省により整備され、(財)自然公園財団と(財)知床財団が分割して事業委託を受けて管理・運営している。また、隣接して道の駅「うとろ・シリエトク」が整備されている。

知床世界自然遺産センターでは、ヒグマやエゾシカなどの知床に生息する動物の実物大の写真や、ヒグマの爪痕などの動物の痕跡の模型を展示し、知床の自然の素晴らしさと利用にあたって守るべきルール・マナーや、知床世界遺産の見どころ、自然のリアルタイムの情報、知床世界遺産の管理についての最新情報を発信している。環境省自然保護官の管理事務所機能も併設されている。

一方で、隣接する道の駅「うとろ・シリエトク」には、観光案内コーナーのほか、レストランや売店（土産物店）があり、遺産センターにはない物販の役割を担っている。遺産センターと道の駅が隣接して同所に整備されているため、これらが一体となり自然遺産の保護や利用に関する情報発信と、物販・飲食の両方の機能を提供することが可能となっている。



知床世界自然遺産センター外観



センター内の展示

資料：「知床世界遺産センター・ルサフィールドハウスパンフレット」（環境省）



道の駅 うとろ・シリエトクの物販

資料：道の駅うとろ・シリエトク HP

② 白神山地世界遺産センター（藤里館）

白神山地の秋田県側に位置する。世界自然遺産「白神山地」を楽しく、深く知ることができる施設であり、白神エリアの散策、登山の情報収集や、環境学習の場としても利用できる。常駐する自然アドバイザーからの解説を聞くこともできる。



施設外観



展示



見取り図

出典：白神山地世界遺産センター（藤里館）パンフレット

③ 白神山地世界遺産センター（西目屋館）

白神山地の青森県側に位置する。世界遺産を守るための調査研究施設。実験室や資料室、会議室などがあり、白神山地で調査研究を行う方への支援も行われている。また、子どもたちの体験キャンプなどの環境教育活動も行われている。展示室では白神山地に関する資料や白神山地の生きものたちの写真などが展示されており、一般利用者がご自由に見ることができ。



施設外観



施設案内

出典：白神山地世界遺産センター（西目屋館）パンフレット

④屋久島世界遺産センター

世界自然遺産や国立公園、屋久島全体の自然についての展示や、屋久島の保全・管理、調査研究、普及啓発活動の拠点施設として情報の収集と蓄積、発信を行う施設。1996年（平成8年）にオープンした。環境省が直轄整備・管理している。環境省自然保護官の管理事務所機能を併設する。



屋久島自然遺産センター外観
構造：鉄筋コンクリート造及び木
造二階建て
建築規模：479m²



屋久島自然遺産センター内の展示

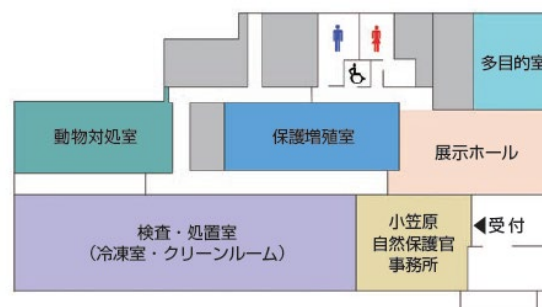
出典：「屋久島自然遺産センターHP」

③小笠原世界遺産センター

世界自然遺産としての小笠原諸島の価値や取組を紹介し、保全管理を行う拠点として2017年5月に開館した施設。施設内は機能毎に部屋が分かれており、展示ホールと多目的室が一般に公開されている。環境省自然保護官の管理事務所機能を併設する。



施設外観



見取り図



展示室



保護増殖室

出典：小笠原世界遺産センターパンフレット

（２）国内先進事例（ビジターセンター等）

① 知床自然センター

知床自然センター	
所在地	北海道斜里郡斜里町大字遠音別村字岩宇別 531
運営形態	斜里町が公益財団法人知床財団へ施設管理事業を委託（指定管理者制度）
職員数	知床財団の職員数（平成 28 年） 理事長 1 名、副理事長 1 名、ほか理事 5 名、幹事 2 名、評議員 7 名 職員 40 名 ※知床財団は当施設及び複数の施設運営（斜里町の知床自然教育研修所・しれとこ 100 平方メートル運動ハウスを含む）及び独自事業等を行っている
整備主体・年	斜里町 1988 年開館（昭和 63 年）
整備規模・整備費	延床面積：1934 m ² （改修前：1941 m ² ） 整備費：約 6 億 2000 万円（映像設備含む）
入館料（大人）	施設：無料 映像施設館：500 円
入館者数	施設：257,595 人（2019 年）、180,549 人（2020 年） 映像施設：年間 2 万人弱程度
管理運営費	約 3000 万円/年（管理委託費） 映像展示館入館料収入は約 400 万円/年程度
施設案内 （HP より）	知床自然センターは、斜里町の市街地から知床峠方面に向かう国道 334 号線と、知床五湖方面へ向かう道道知床公園線との分岐点に位置します。 MEGA スクリーン KINETOKO（キネトコ）は、Kinematograph（映画）と Shiretoko（知床）を名前の由来とする知床自然センターの映像館です。 知床の自然をより深く知り、楽しんでいただくためのオリジナル映像作品『知床の冒険』『THE LIMIT』を毎日上映しています。 自然と人の多様な価値観の交流を目指し、知床自然センターでは様々な企画展を開催しています。企画展のテーマは多岐に渡り、地域内外のアーティストやクリエイターによる作品展をはじめ、知床の歴史や文化にまつわるもの、大学や博物館による調査研究、アクティビティなど、多角的な切り口で知床の奥深い魅力を紹介しています。既成の価値観にとらわれない新たな発見と交流を育むスペースです。

【写真・図】（HP 掲載写真等）



外観



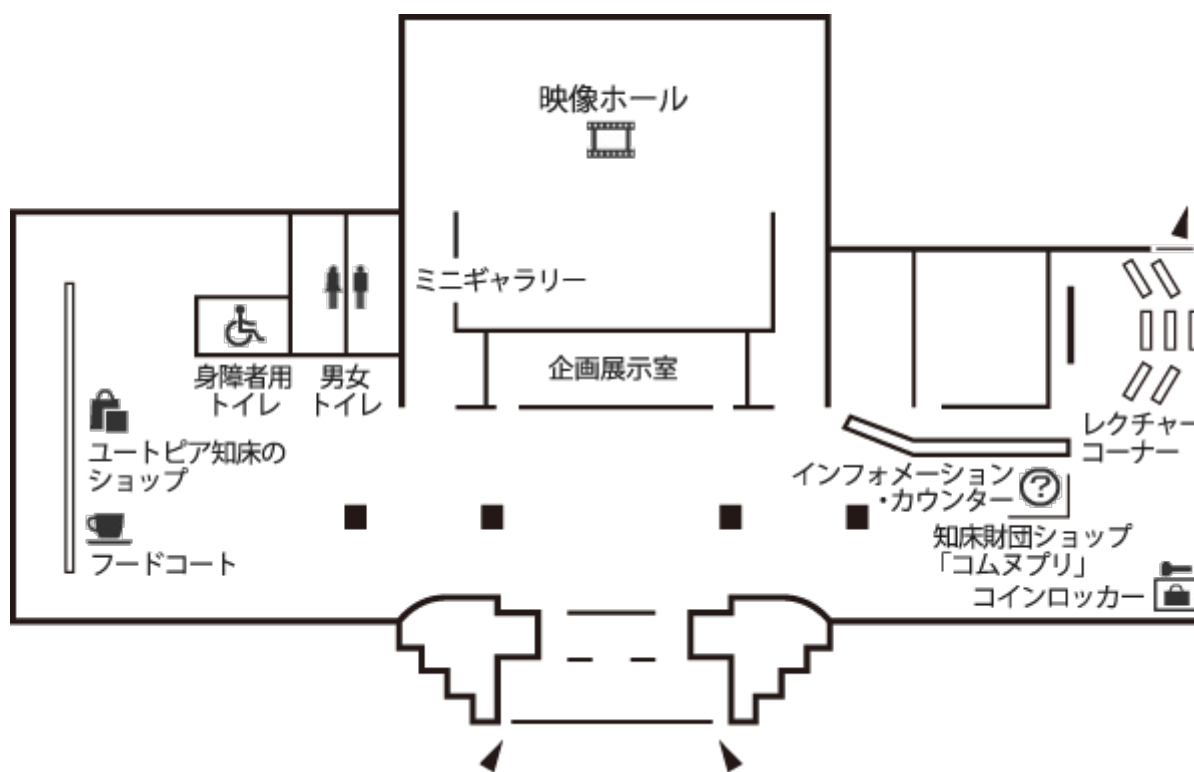
映像ホール



企画展示室



ミニギャラリー



館内見取り図

【ホームページ】

<https://center.shiretoko.or.jp/>

②青森県白神山地ビジターセンター

青森県白神山地ビジターセンター	
所在地	青森県中津軽郡西目屋村大字田代字神田 61-1
運営形態	・青森県が青森県森林組合連合会へ施設管理事業を委託（指定管理者制度） ・同連合会が平成 18 年より継続して受託
職員数	事務担当 3 名（館長、副館長を含む）、 映写担当 2 名 受付担当 4 名 ※いずれも平成 28 年度時点
整備主体・年	青森県 1998 年開館（平成 10 年）
整備規模・整備費	延床面積：3,178.5 m ² 整備費：約 38 億 8300 万円
入館料（大人）	施設：無料 大型映像観覧：200 円
入館者数	47,355 人（令和元年度）、21,468 人（令和 2 年度）
管理運営費	約 7,000 万円/年
施設案内 （HP より）	白神山地ビジターセンターではトレッキングコースの散策情報などをお知らせしております。白神山地を知る第一歩として是非おたちより下さい！ ●映像体験ホール デジタルプロジェクターにより、圧倒的な迫力と臨場感で白神山地の四季を紹介し、かけがえのない自然を次の世代へ継承していくことの大切さを伝えます。 ●展示ホール ブナの一生、ブナ林のしくみ、白神山地の生態系や、人間の生活との関わりを学ぶミュージアムです。白神山地の自然を模型やパネルなどでテーマごとにご紹介しております。
【写真・図】（HP 掲載写真等）  外観  映像体験ホール	

展示ホール

展示ホールは、ブナの一生、
ブナ林のしくみ、白神山地の生態系や、
人間の生活との関わりを学ぶ
ミュージアムです。

また、音と光の演出で夏のブナの森の
1日を約20分で体験できるように
なっています。

ブナの起源

ブナの誕生。世界自然遺産となる白神山地の軌跡。白神山地から採取した地層とともに、「ブナの森・白神山地」8000年の歴史をたどります。



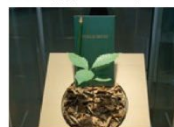
ブナの営みと知恵

ブナの生態に隠されている、「動植物と共存する術」、「遺伝子を引き継ぐメカニズム」をひも解きます。



ブナの一生

何百年もの長い年月をかけて成長する一本のブナ。その成長記録を、縮小ジオラマで紹介しています。



世界最大級のブナの森。
私達の暮らしと様々な動植物を守り続けています

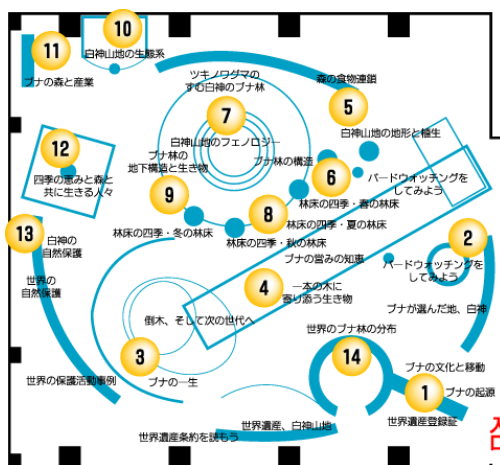


白神山地のフェノロジー

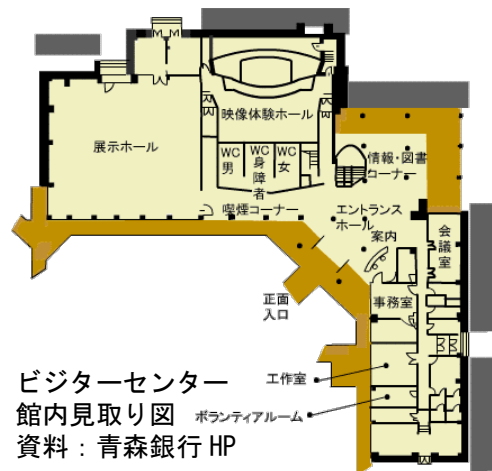
足元に広がる白神山地の全景とともに、動植物の暮らしを12ヶ月のカレンダーで紹介。ブナの原生林の世界が体験できます。



展示ホールの案内（パンフレットより）



展示ホール見取り図



【ホームページ】

<http://www.shirakami-visitor.jp>

③屋久島町立屋久杉自然館

屋久島町立屋久杉自然館	
所在地	鹿児島県熊毛郡屋久島町安房 2739-343
運営形態	屋久島町直営（商工観光課）
職員数	13名（屋久島町雇用のスタッフ：町からの派遣はなし） ※平成28年度時点
整備主体	旧屋久町 1989年開館（平成元年）
整備規模・整備費	建設規模：1,180.64 m ² 延床面積：1,723.25 m ² 整備費：8億6千万円
入館料（大人）	600円
入館者数	平成27年度：26,737人
管理運営費	人件費・事業費：約3600万円 （入館料収入が約2400万円であるため、屋久島町の支出は約1200万円）
施設案内 （HPより）	本館 コンクリート円筒構造の2つの展示棟と、それらを結ぶ屋久杉造のエントランス・ギャラリー棟で構成された2階建てで、桝ブロックの床と杉造りの館内は木のぬくもりのある気持ちの良い空間となっています。 屋久杉の長生きの秘密や人と森とのかかわり、屋久島の自然がよくわかる展示や映像があります。オリジナルの書籍やミュージアムグッズも販売しています。 別館 展示室：江戸時代の斧跡がのこるつくば博(Expo'85)出展の屋久杉巨大根株と特設展示があります。 研修室：クラフト教室を行います。学習や会議の場としても利用できます。 クラフト室：屋久島のいろいろな樹木でミュージアムグッズや館内の展示物などを制作しています。
【写真・図】（HP掲載写真・見取り図）  本館 外観  別館 外観	

本館の写真



縄文杉「いのちの枝」



自然パノラマ館



縄文杉情報エリア



オリエンテーションVTR（屋久島「自然と暮ら



屋久島の木材（体験館）



実際に使われた山樵具（体験館）



地理コーナー（屋久島の地質と岩石）



地理コーナー（屋久島の地図と地形模



屋久杉実寸大写真



特別展



紀元杉の枝



小杉谷・石塚の暮らしを紹介する展示コーナー

別館の写真



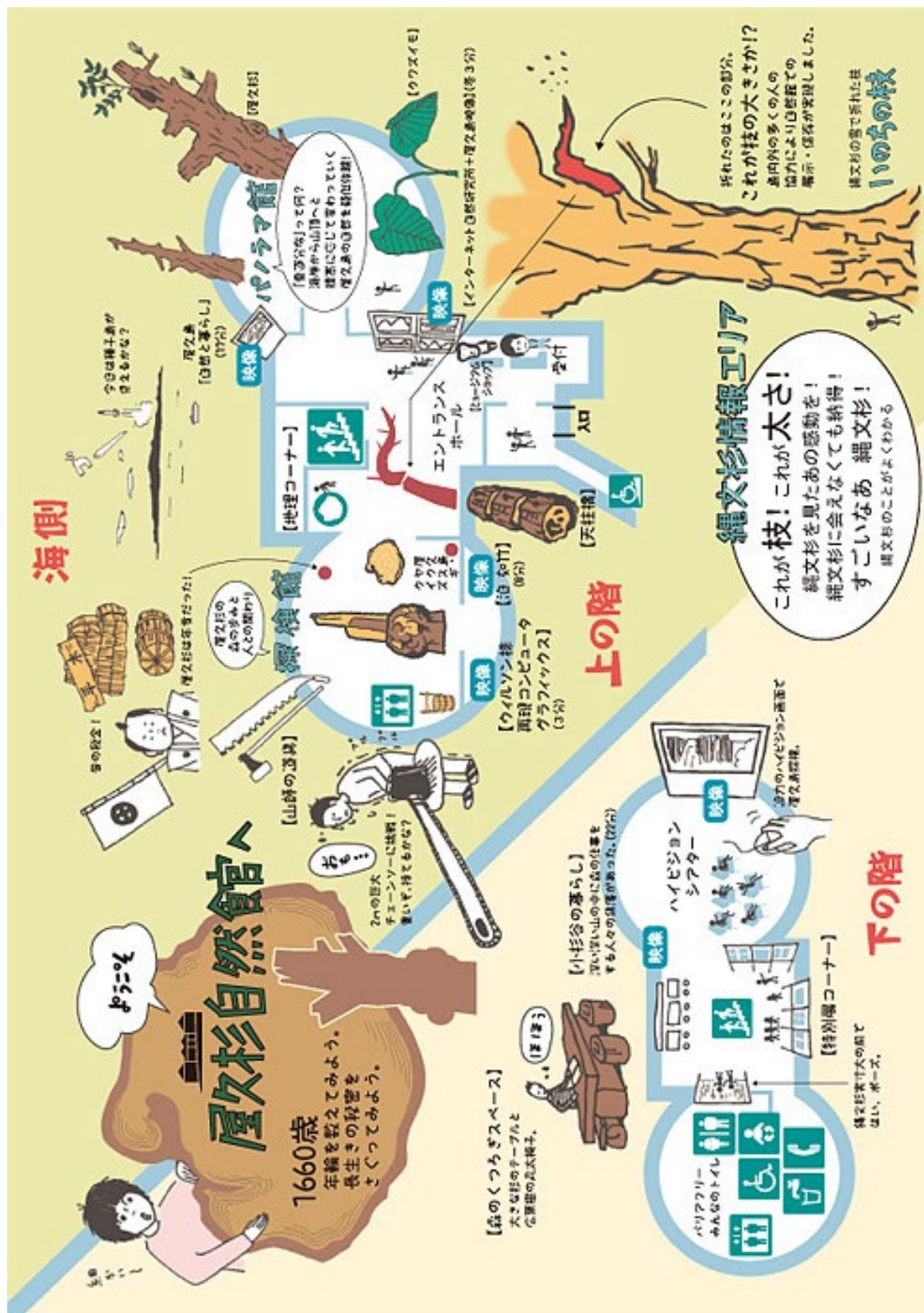
展示室



庭園



クラフト室

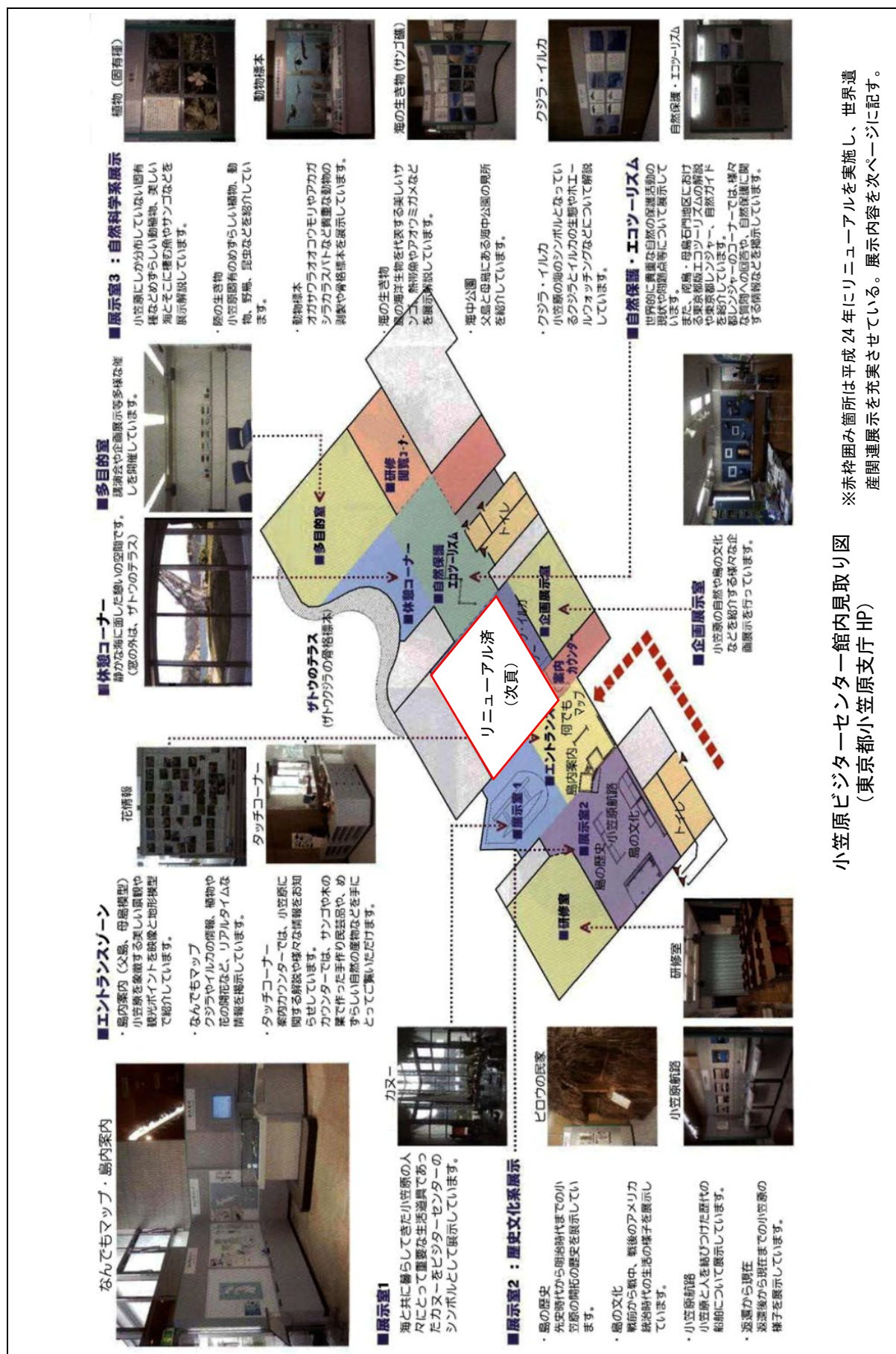


【ホームページ】

<http://www.yakusugi-museum.com/>

④ 小笠原ビジターセンター

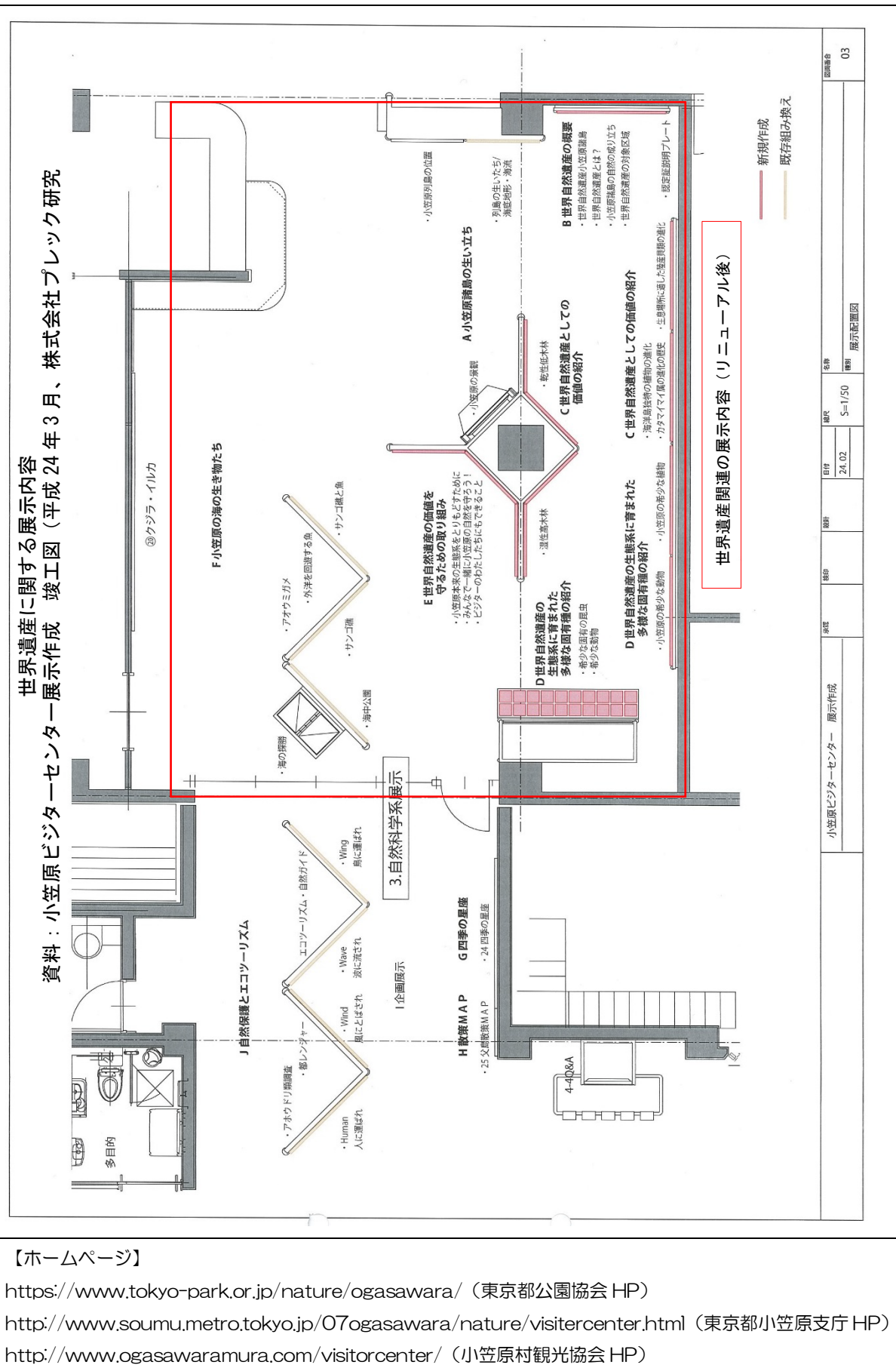
小笠原ビジターセンター	
所在地	東京都小笠原村父島西町
運営形態	東京都が公益財団法人東京都公園協会へ施設管理事業を委託 (指定管理者制度：現在、平成 28 年 4 月 1 日から平成 35 年 3 月まで)
職員数	1 名（非常勤職員）※ただし解説員は業務委託による。平成 28 年度時点
整備主体・年	東京都 1988 年開館（昭和 63 年）：2007 年に新館開館（平成 19 年）
整備規模	延床面積：924.12 m ²
入館料（大人）	無料
入館者数	令和元年度：約 17,000 人
管理運営費	約 2,050 万円/年（平成 27 年実績）
施設案内 (HP より)	小笠原ビジターセンターでは、小笠原諸島が海洋島として誕生してからの歴史、美しい海、めずらしい動植物やクジラ・イルカ情報などについて、わかりやすく解説しています。貴重な自然の保護・保全活動やエコツーリズムの取り組みなども紹介しています。 さらに、小笠原の自然や歴史を幅広く紹介するため、さまざまな企画展示や講演会、体験プログラム、自然観察会などを開催しています。大人から子どもまで楽しめるイベントプログラムにぜひご参加ください。
【写真】（HP 掲載写真）  小笠原ビジターセンター 外観 (東京都公園協会 HP)  小笠原ビジターセンター 外観 (東京都小笠原支庁 HP)	



小笠原ビクターセンター館内見取り図
(東京都小笠原支庁 HP)

※赤枠囲み箇所は平成 24 年にリニューアルを実施し、世界遺産関連展示を充実させている。展示内容を次ページに記す。

世界遺産に関する展示内容
資料：小笠原ビジターセンター展示作成 竣工図（平成 24 年 3 月、株式会社ブレック研究



【ホームページ】

<https://www.tokyo-park.or.jp/nature/ogasawara/>（東京都公園協会 HP）

<http://www.soumu.metro.tokyo.jp/O7ogasawara/nature/visitorcenter.html>（東京都小笠原支庁 HP）

<http://www.ogasawaramura.com/visitorcenter/>（小笠原村観光協会 HP）

(3) 周辺類似施設等

① 西表島野生生物保護センター

- 西表野生生物保護センターは、イリオモテヤマネコをはじめとする西表島の絶滅の恐れのある野生生物の保護増殖、調査研究、普及啓発の拠点である。
- 西表野生生物保護センターの年間利用者数は2019年度は約1.5万人。近年は減少傾向にある。
- 令和3年度に老朽化した展示を改修し、来訪者に対して野生生物保護に関する理解や関心を深める施設としてリニューアル予定。西表島の様々な自然環境のつながりや生物多様性、イリオモテヤマネコやカンムリワシをはじめとする野生生物保護の理解と関心を高めることを目指している。
- また、令和3年度にイリオモテヤマネコ保護収容用の野外ケージが新たに整備されており、今後はバックヤードツアーにおける活用も想定されている。
- 上記を踏まえて旧野外ケージ周辺については、気軽に西表島の自然を楽しめる「自然散策フィールド」と位置づけ、館内展示と連携し、野生生物保護の意識醸成、環境教育の促進等の機能を強化するとともに、センターでの滞在時間の増加、世界自然遺産地域の負荷軽減に資することが期待されている。

【西表野生生物保護センターの入館者数推移】

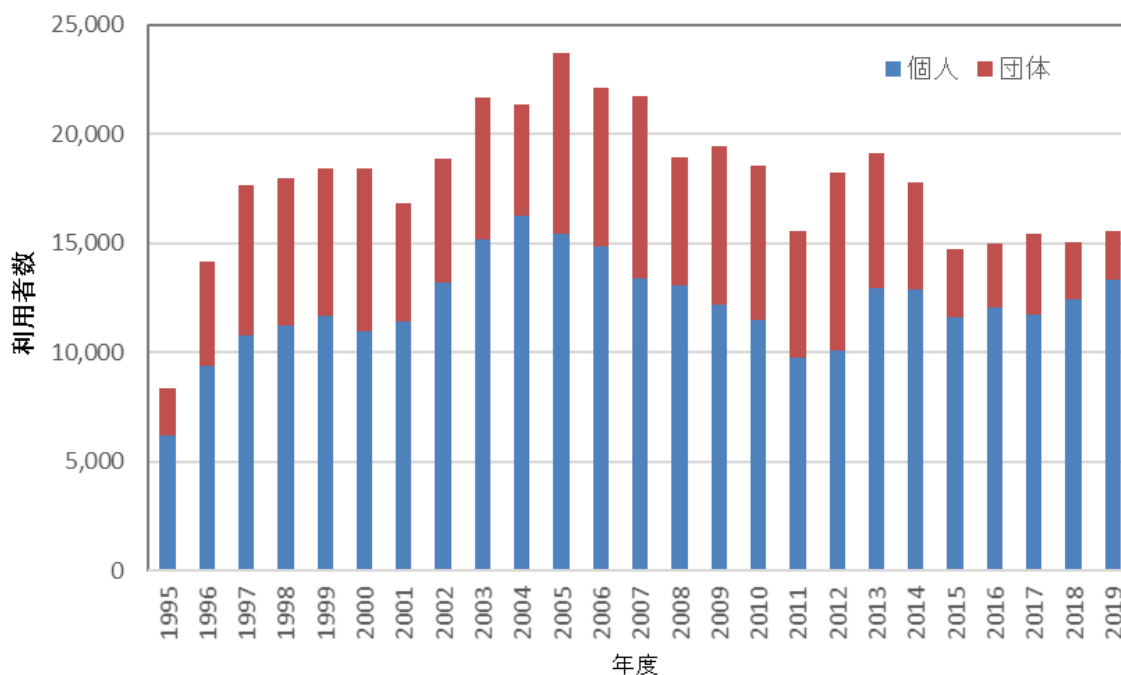
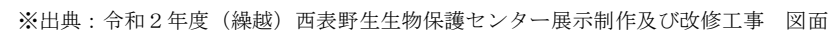


図 西表野生生物保護センターの利用者数の推移

29



【西表野生生物保護センターの自然散策フィールド整備構想】

西表野生生物保護センター自然散策フィールド整備基本構想の構成とポイント

1. 背景・目的

○西表島では世界遺産区域に入るガイドツアー等の増加が顕著であり、IUCN 勧告等において増加する観光利用の影響を最小限に抑えるための実効性のある観光管理が必要とされている。

○西表野生生物保護センターは令和3年度に老朽化した展示を改修し、野生生物保護に関する普及啓発施設としてリニューアル予定。

○令和3年度にイリオモテヤマネコ保護収容用の野外ケージが新たに整備され、バックヤードツアー等の活用も想定される。

⇒旧野外ケージ周辺については、気軽に西表島の自然を楽しめる「自然散策フィールド」とし位置づけ、館内展示と連携し野生生物保護の意識醸成、環境教育の促進等を図る。また、今後整備予定の世界遺産センターやフィールドセンターとも連携し、遺産価値の普及啓発、遺産地域の負荷軽減に資することが期待される。



2. 自然散策フィールドの現況

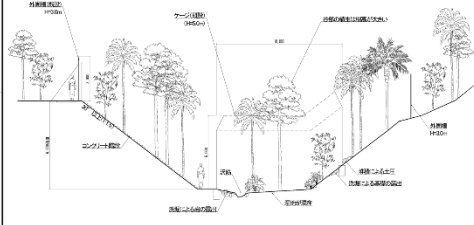
○旧ケージ設置による沢筋流路の改変・暗渠化、樹木伐採、土壌流出によるゴルジュ化の進行、施設老朽化による鍾水流出など、沢筋の環境が大きく変化している。

○沢筋は環境改変の影響を受けているが、現状でも絶滅危惧種を含む動植物がみられ、溪流環境を再生することで、より多様な水生生物、鳥類等を観察できる場となる可能性が

○旧ケージ周辺には伐採を免れた巨木などが存在し、谷地形を利用し高所から樹冠や花を眺めるなど、普段とは違う視点で観察することが出来るフィールドとして活用できるポテンシャルがある。



▲洗場が進んだケージ内の水路

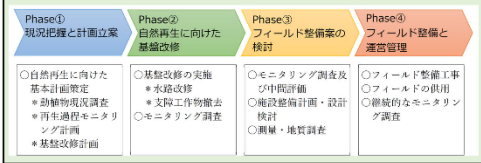


3. 自然散策フィールドの整備目標

◇西表島らしい溪流環境の再生及び自然体験フィールドを創出し、来島者が気軽に西表の自然を体験したり、イリオモテヤマネコの生息環境の雰囲気になれる機会を提供することで、利用者の満足度の向上と遺産地域の利用負荷軽減を図る。

◇自然散策フィールドを保護センターの野外展示と位置づけ、館内展示との連動による野生生物保護の意識醸成、環境教育の促進、滞在時間の増加などを旨とする。

◇自然散策フィールドの整備に際しては、まず自然再生のための基盤整備を先行し、再生状況を踏まえて、順応的に利用環境整備を進めていく。



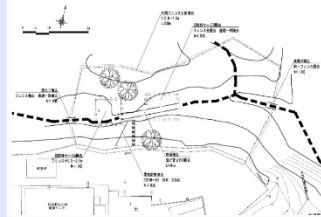
4. 自然再生方針

【自然再生の方針】

◇旧ケージ整備による人為の影響を取り除くことにより、溪流環境を再生し自然が自らの力で回復していくことを手助けする。

◇旧ヤマネコケージにより複数箇所で水流が阻害されていることから、流路の改善等を行い溪流環境（溪流、滝、水たまり等）を再生することで、鳥や昆虫等が集まる自然フィールドとしての価値を高める。

◇自然再生の過程も含めて野外展示のテーマとし、環境教育の素材として活用していく。



【整備に係る環境配慮】

◇ケージや検査棟に収容しているヤマネコに影響を与えないための配慮、フィールド内の希少種への配慮（十分な工期、バッファゾーン設定、騒音対策、モニタリングを踏まえた工事方法等）

【自然再生過程のモニタリング計画】

・植物、動物、物理環境の観点から自然再生過程を把握・評価し、対応方針検討に資する調査の枠組みを検討。

5. 利用施設整備方針

◇西表の森や溪流の魅力を引き出すため「空中回廊」や「溪流観察路」等を整備。

◇館内展示と連携してヤマネコ保護の取組等への理解を深めるため、旧ケージを活用し解説機能を確保。

◇利用者がゆっくり滞在できる野外休憩スペースを確保。

◇あわせて、ヤマネコに影響を与えないための配慮事項を設定。

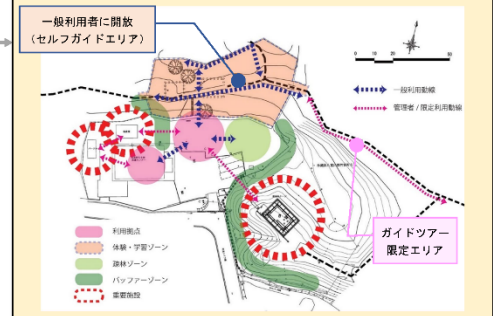


6. 管理運営方針

○フィールドの運営

- ※ターゲットとなる利用者層毎に提供する価値・利用方法を設定
- ※バックヤードツアーでの活用（一般開放エリアと限定利用エリア）
- ※管理運営体制：民間団体との連携

○施設の維持管理項目・頻度の設定



7. 事業スケジュール及び概算工事費

※出典：令和3年度西表野生生物保護センター自然散策フィールド整備基本構想策定業務報告書（令和3年9月）

② 西表島内での新たな施設整備計画等

＜西田川線歩道・駐車場＞

（１）西田川線歩道

【整備方針】

- ・西田川は河口付近の船浦湾からマングローブ林が連なっており、その中をカヌー等で漕ぎ抜くことが出来る。中流域のトレッキングルートでは幅 20m にも及ぶサンガラの滝を見ることができ、滝つぼに入ったり、滝の裏側に回って楽しむことが出来る。
- ・近年、利用者が急増しており、年間利用者は 1 万人強で、日最大 130 人程度の利用がある。
- ・西田川の河口付近は国有林に囲まれる形で民有地が存在し、民間ガイド事業者の拠点となっている。また近隣の河川脇には当該民間事業者による木デッキが整備されており、カヌー乗り場として利用されている。
- ・西表島エコツーリズム推進全体構想では、ヒナイ川・西田川エリアについて特定自然観光資源の指定を予定しており、西田川の立ち入りに関しては、事前承認が必要となる他、エコツーリズム推進協議会が認めたガイド（登録引率者）の同伴が義務付けられる。また、1 日当たり上限 100 人、1 ガイド当たり 8 人、1 事業者 1 日あたり 16 人という人数制限に係る利用ルールが設定される予定である。
- ・ヒナイ川・西田川の特定自然観光資源への指定に関しては、ヒナイ川への利用集中を緩和するため、西田川を含む他のエリアに利用を分散させる目的もあり、当該制度の運用と時期を合わせて、西田川線歩道において利用分散に資する施設整備として、駐車場、歩道、カヌー乗降のための木デッキ等の整備を行う。

（駐車場）

- ・現状の駐車スペースは河口付近の民有地に限られるため、登録引率者の利用のため県道脇に新たに駐車スペースを確保する。駐車場の立地については、県道脇の湿地を極力避けた形で配置する。

（歩道）

- ・県道から西田川のカヌー乗降箇所にアクセスするための歩道の整備を行う。森林内に過去に使用されていた道路跡が残っているため、そのルートを活用して、伐開や整地等の必要最小限の整備を行う。

（カヌー乗降用の木デッキ・土留め工）

- ・西田川河口付近の河川脇に民間事業者が設置した既存のカヌー乗降用の木デッキについて、登録引率者資格を有するガイドが共同で利用できるデッキとして環境省が再整備を行う。
- ・西田川中流域のカヌー乗降箇所については、現状では施設等は整備されていないが、今後想定される利用者の増加に対して、カヌー係留スペース（タンデム 30 艇分程度）の確保及び乗降箇所の浸食防止・根系保護のため、カヌーが係留可能な土留め工を整備する。

※出典：西表石垣国立公園西表地域整備計画（令和 3 年 3 月）

＜フィールドセンター整備＞

（３）フィールドセンター（仮称）

- ・世界遺産推薦地における自然体験型観光が盛んな西表島の北～西部地域において、遺産地域利用の事前レクチャーなど、フィールドの適切な利用推進に資する普及啓発・観光管理機能の強化に資する施設整備について検討する。

- フィールド利用ルールの周知
- 特定自然観光資源の立入承認手続きや事前講習の受付窓口
- 利用フィールドの巡視・モニタリング
- 適正利用に資するガイド等の人材養成 等

- ・西表島では、適正な観光管理の中核を担う組織として（仮称）一般財団法人西表財団（以下、「西表財団」という。）の設立が準備されていることから、当該組織と連携した整備・運営を検討することで、フィールド利用拠点としての機能強化や、施設・運営の合理化等に留意する。
- ・立地については西部地域の各利用フィールドへのアクセスが容易な箇所への配置を検討する。

＜課題＞

- ・環境負荷低減や合理化等に留意し、エコでスモール&コンパクトな施設とする。
- ・運営は国有財産使用許可の公募とし運営費を運営団体に担う方式とする。

※出典：西表石垣国立公園西表地域整備計画（令和３年３月）

③ その他周辺類似施設等

<ゆがふ館（竹富島）>

- ・西表石垣国立公園竹富島の自然と伝統文化、芸能を紹介する施設として環境省が整備
- ・敷地面積約 3,781 m²、床面積約 627 m²の木造平屋建て建築である。
- ・2004（平成 16）年 6 月 24 日に開館
- ・運営は地元の NPO 法人である「特定非営利活動法人 たきどうん」が行っている。
- ・竹富島のフィールドミュージアムのインフォメーション施設として竹富島の旬の情報を提供するとともに、島の楽しみ方や守ってほしいマナーの周知、島民と来訪者の交流、『竹富島の自然環境』情報の分析や蓄積、内外への発信といった活動を行っている。



外観および外構



入口付近の展示スペース



展示状況



映像展示室



来訪者作業スペース



事務スペース（右奥）

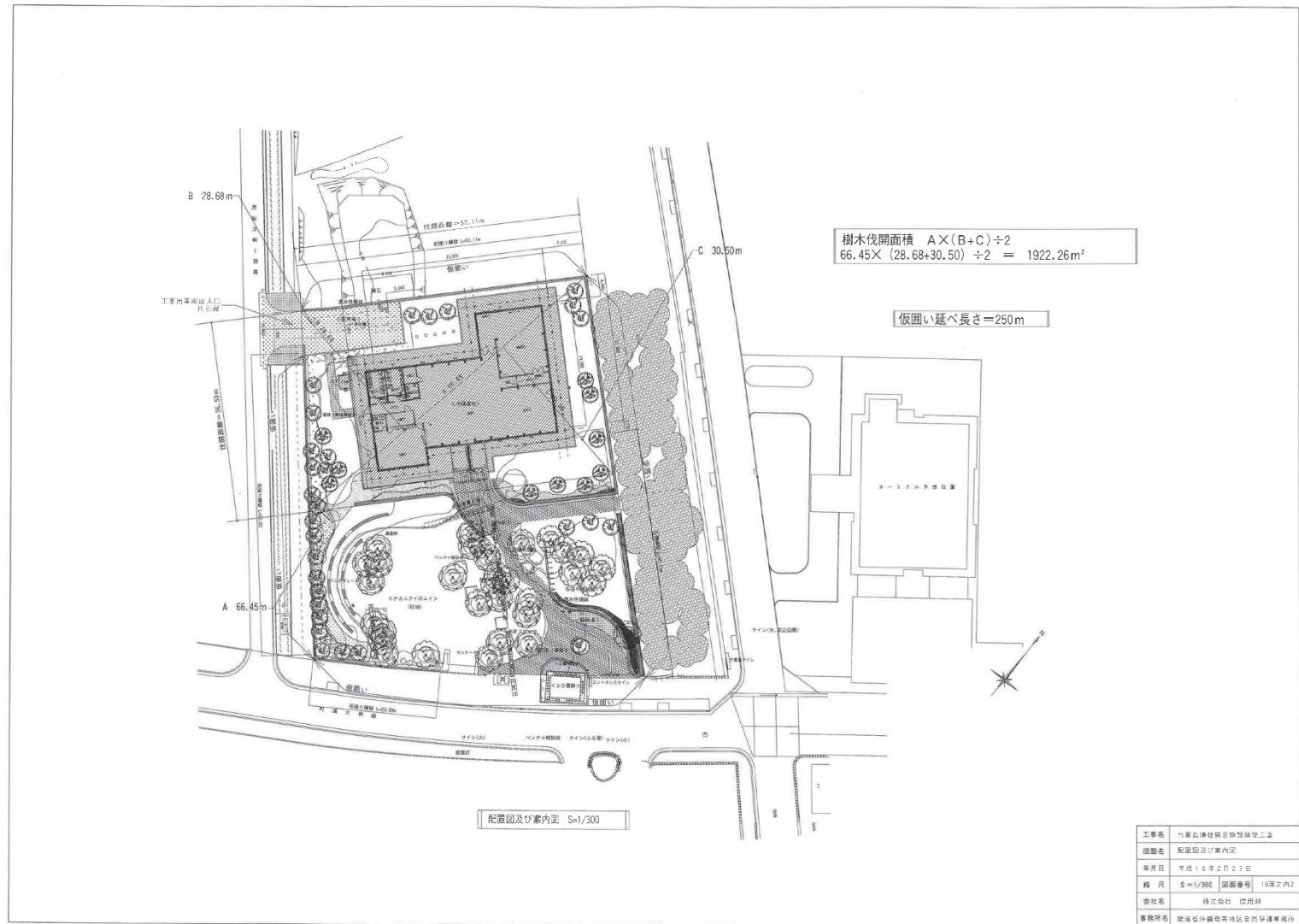


図 ゆがふ館建築図面

<国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター（石垣島）>

- ・サンゴ礁に関する情報の収集、整理、提供、石垣島周辺海域によるサンゴ礁モニタリング調査、普及啓発活動などを行うため、施設には実験室、標本室、多目的レクチャー室、資料室などが整備されている。
- ・施設内に環境省石垣自然保護官事務所の事務スペースが併設されている。
- ・屋根の周辺部には赤瓦を用いているが、上面を平らにすることで建物全体としての高さが抑えられている。



外観 1



外観 2



図 施設見取り図 （出典：国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターウェブサイト）

＜黒島ビジターセンター（黒島）＞

- ・竹富町の文化財指定地である「番所跡」に建てられている。
- ・黒島の自然や民俗資料に関する展示のほか、島の昔の生活様式等も紹介されており、一般利用者は無料で展示棟を見ることができる。



施設外観

出典：環境省ウェブサイト

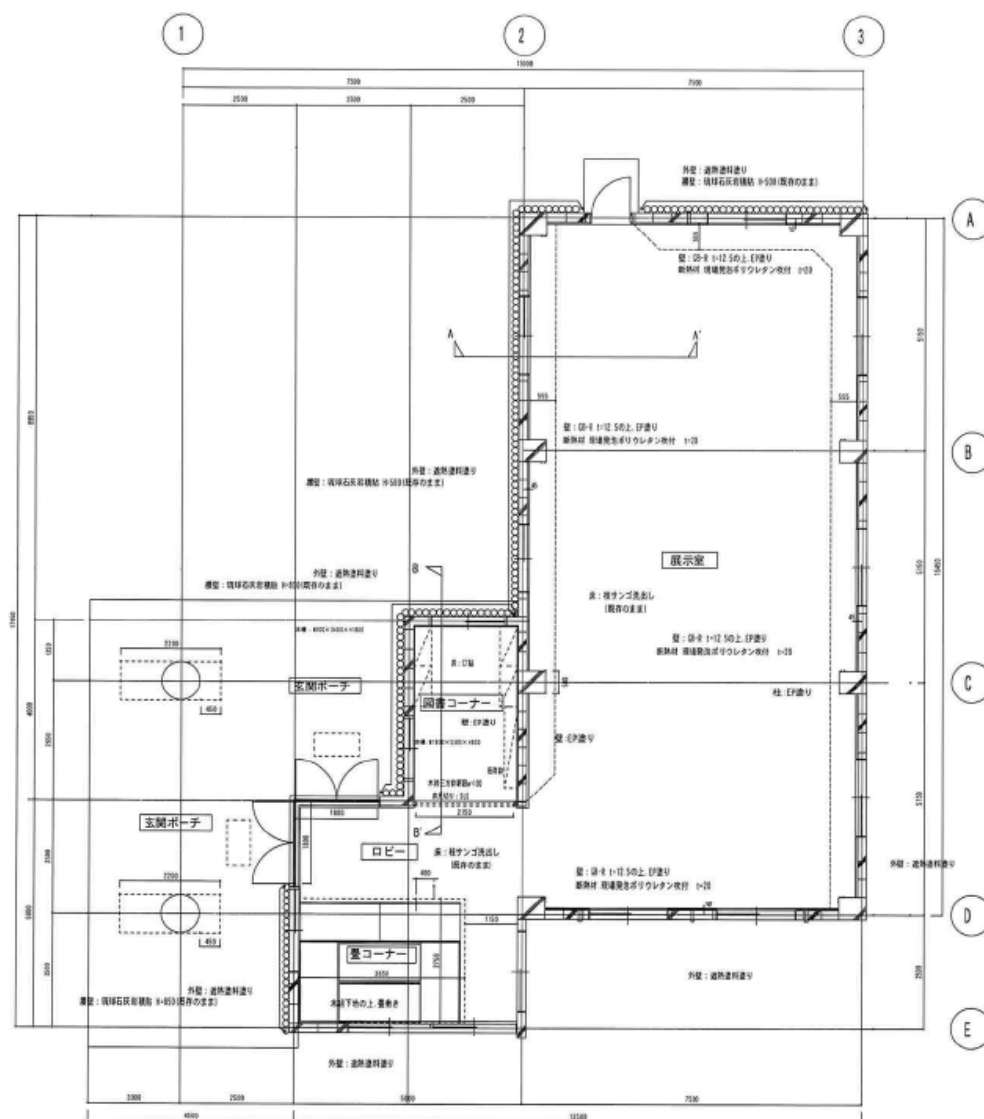


図 黒島ビジターセンター施設図面

(出典：平成 22 年度黒島博物展示施設改修工事完成図)

4) 敷地の条件

(1) 地形

敷地は西表島大原港より北西約 300m に位置し、敷地北側は仲間川の河口と面する。

ハザードマップでは高潮・津波共に敷地北側が一部範囲となっている可能性があるものの、敷地範囲全般としては対象外となっている。(竹富町災害危険予想箇所図より)

敷地東側には自然貯水と考えられる池が存在する。湧水の有無、地下水の流入の有無、池外への流出位置については確認が必要となる。



(2) 周辺環境

周辺環境は敷地南側に県道 215 号線（白浜南風見線）が接道しており、県道 215 号線をはさんで南側には竹富町離島総合センターが位置し、西表島への来訪者の 8 割弱が利用する西表島の玄関口である大原港から近く、来訪者がアクセスしやすい場所にある。

敷地西側は民間地と環境省那覇自然環境事務所大原詰所が位置し、北～北東側にかけては国有林と接しており、当該国有林は水源涵養及び土砂流出防備保安林に指定されている。



(3) 土地所有

敷地内は全て竹富町有地である。

(4) 各種法規制等

世界遺産センターを当地に計画するにあたり、以下の法規的な整理が必要となる。

- ・建築基準法：建築用途については展示施設として計画を検討
- ・都市計画法：都市計画区域外に位置しており、RC 平屋 200 平方メートル以下、特殊建築物等で 200 平方メートル以下であれば、町長への工事届の提出、それ以外は建築確認が必要となる。また、別途、開発行為・許可申請の必要性の有無について検討が必要である。
- ・沖縄県建築基準法施工条例：建築用途については展示施設として検討
- ・沖縄県景観形成条例：景観条例を制定している市町村においては、各市町村の景観条例に基づく届出を行う必要あり（この場合、沖縄県への届出の必要はなし）。市町村によって届出対象行為が異なる。
- ・竹富町景観条例：集落景観保存地区に位置しており、西表島においては、以下の景観形成基準が設定されている。

景観形成基準	
高さ・配置	①建築物の高さは、原則として、大原地区、大富地区においては4階以下かつ13m以下、その他の地区においては3階以下かつ12m以下とする。 ②建築物が大規模となる場合は、周辺への圧迫感を軽減するために分節化、分散配置等の工夫を行うこととする。 ③地形を活かした建築物等の配置を行うこととする。
形態・意匠	①建築物の屋根の形状は、勾配屋根とすることが望ましい。 ②周辺の景観との調和に配慮し、光を反射する素材は用いないものとする。
色彩	①建築物の外壁は周辺の景観に配慮し、落ち着いた色彩（マンセル値：明度8以上、彩度2以下）を基調とする。但し、着色していない木材等の自然素材によって仕上げられるものや、外壁の一部にアクセントとして用いる色彩についてはこの限りではない。 ②建築物の屋根等に用いる色彩は、極端な低明度、高彩度を避け、周辺の景観との調和に配慮することとする。
敷地内の緑化、屋敷囲い(垣・柵)等	①敷地内は緑化するものとする。 ②既存のフクギ等の屋敷林及び石積みは、できる限り保全・活用するものとする。 ③屋敷囲いはできる限り石積み又は生垣とし、ブロック塀等の人工物を設置する場合には、緑化等により修景するものとする。 ④屋敷囲いの高さは周辺に圧迫感を与えないよう、敷地地盤面から1.0m程度とする。
その他	①屋外において常時設置する照明は、過剰な光が散乱しないようにし、過度の明るさや色彩のものを用いないこととする。

- ・自然公園法：西表石垣国立公園（普通地域）に位置しており、以下の行為を行う場合に届出が必要になる。。

- ①一定の規模を超える工作物(例：建築物にあっては高さ13m又は延べ面積1,000㎡)を新築し、改築し、又は増築すること。
- ②特別地域内の河川、湖沼等の水位又は水量に増減を及ぼさせること。
- ③広告物その他これに類する物を掲出し、若しくは設置し、又は広告その他これに類するものを工作物等に表示すること。
- ④水面を埋め立て、又は干拓すること。
- ⑤鉱物を掘採し、又は土石を採取すること。
- ⑥土地の形状を変更すること。
- ⑦その他

<現地確認結果からの施設配置・整備上の留意点>



① 県道と導入路との接道位置に関する制約条件

- ・敷地南東端部において県道が大きくカーブしており、上原方面から大原方面に向かう県道通行車両から敷地に入出入りする車両が視認しにくいと、交通安全上の理由で接道位置をカーブ出口から出来るだけ西側にずらすよう、警察から指導が入る可能性がある。
- ・県道を挟んで敷地の反対側（南側）から侵入する車道があるため、当該導入路との位置関係として交差点形式で敷地導入路を接道するよう、警察から指導が入る可能性がある。
- ・県道が大原方面から上原方面にかけて上り勾配の傾斜があり、敷地南西端部においては、県道の路面レベルと敷地レベルとの間に約1 m以上の高低差があるため、敷地南西側に接道位置を設けると、導入部に切土工が必要となり、導入路の勾配緩和のために南側の敷地を有効に使用できなくなる可能性がある。

② 眺望景観を保全・活用するうえで配慮

- ・当該敷地は、敷地の北西部方向に背景となる山並みが樹林の合間に見え隠れする広がりのある眺望を有しているため、その眺望を活かすためには、敷地の北西部分(青枠で表記した部分)にはできるだけ高さのある施設（ホール）の配置を避けるのが望ましい。
- ・一方、仲間川の橋上から大原方面を眺めた際に、当該敷地は樹林に覆われた海岸線の崖上に位置しているため、敷地の北端部に高さのある施設（ホール）を配置すると、緑のスカイライン

の上に施設が大きく出現することとなり、仲間川方向からの眺望景観を阻害する要因となるため、避けることが望ましい。

③ 施設相互の位置関係に関する考え方

- ・世界遺産センターと博物館に関しては、特に観光客へのサービス機能（交流スペース等）の共有が、利用者の利便性と整備費用や管理運営上の効率性の両面において有効であることから、施設の連結・連続性が保たれることが望ましい。
- ・博物館と図書館に関しては、施設機能上及び運営面での親和性が高いことから、施設の一体化・内包化等の可能性がある。
- ・博物館・図書館・ホールの整備に関しては、同一の補助事業からの予算確保を前提とした場合には、複合施設としての一体的な整備が求められる可能性があり、同一敷地内に博物館・図書館・ホールが一体化した 4000m²を超える大規模な複合施設が配置される場合には、世界遺産センターの施設配置については、隣接する大規模施設による圧迫感等も考慮したうえで、施設配置を検討する必要がある。

④ 地形改変の最小化に関する考え方

- ・当該敷地の東側には自然貯水と考えられる池が存在し、両生爬虫類等の生息環境となっている可能性がある。また、自然公園内であること、池の下流側が穀粒林の保安林に指定されていること等を考慮するならば、敷地内の地形改変は最小化することが望ましい。
- ・敷地を広く使用するために、池の埋め立てが必要になった場合には、地形改変後の敷地東側の斜面林からの流入水の処理については、慎重な対応が必要になる他、埋め立てに必要となる土砂の島外搬入は西表島への外来種の侵入リスクが大きいことから、できる限り回避する方向で検討する必要がある。

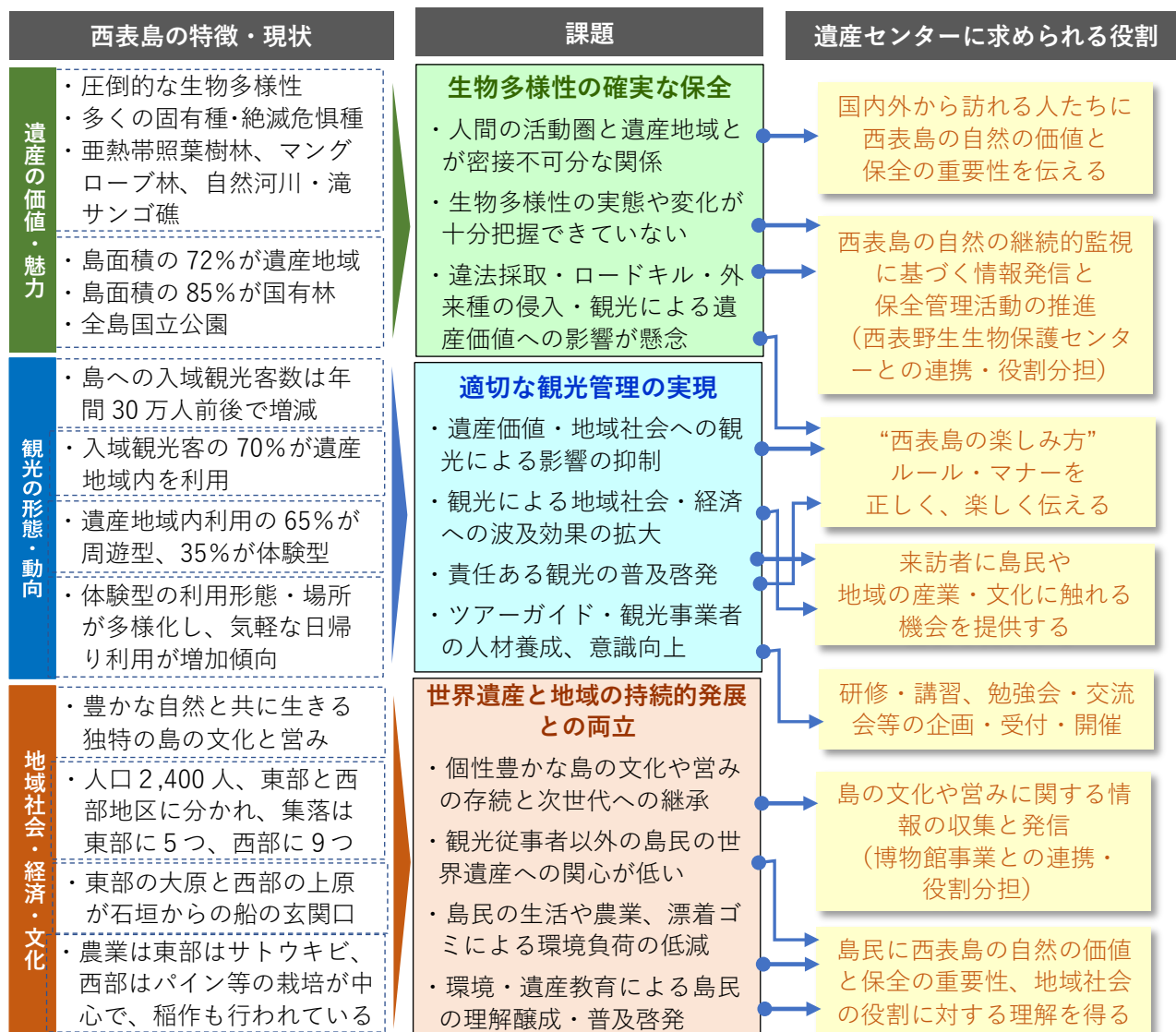
3. 整備基本構想

1) 基本理念・基本方針

(1) 西表島の現状・課題と世界遺産センターに求められる役割・機能

世界遺産地域については、資産価値の適切な保安全管理及び普及啓発等が求められることから、保安全管理活動の推進、資産価値の重要性に関する解説・展示、適正利用のためのルール等のガイダンス、環境教育・研修の実施、保全活動への参加・協働機会の提供、各種モニタリング・調査・研究データ等の集約・蓄積・発信など、世界遺産センターには世界遺産管理の拠点施設としての機能の確保が求められる。

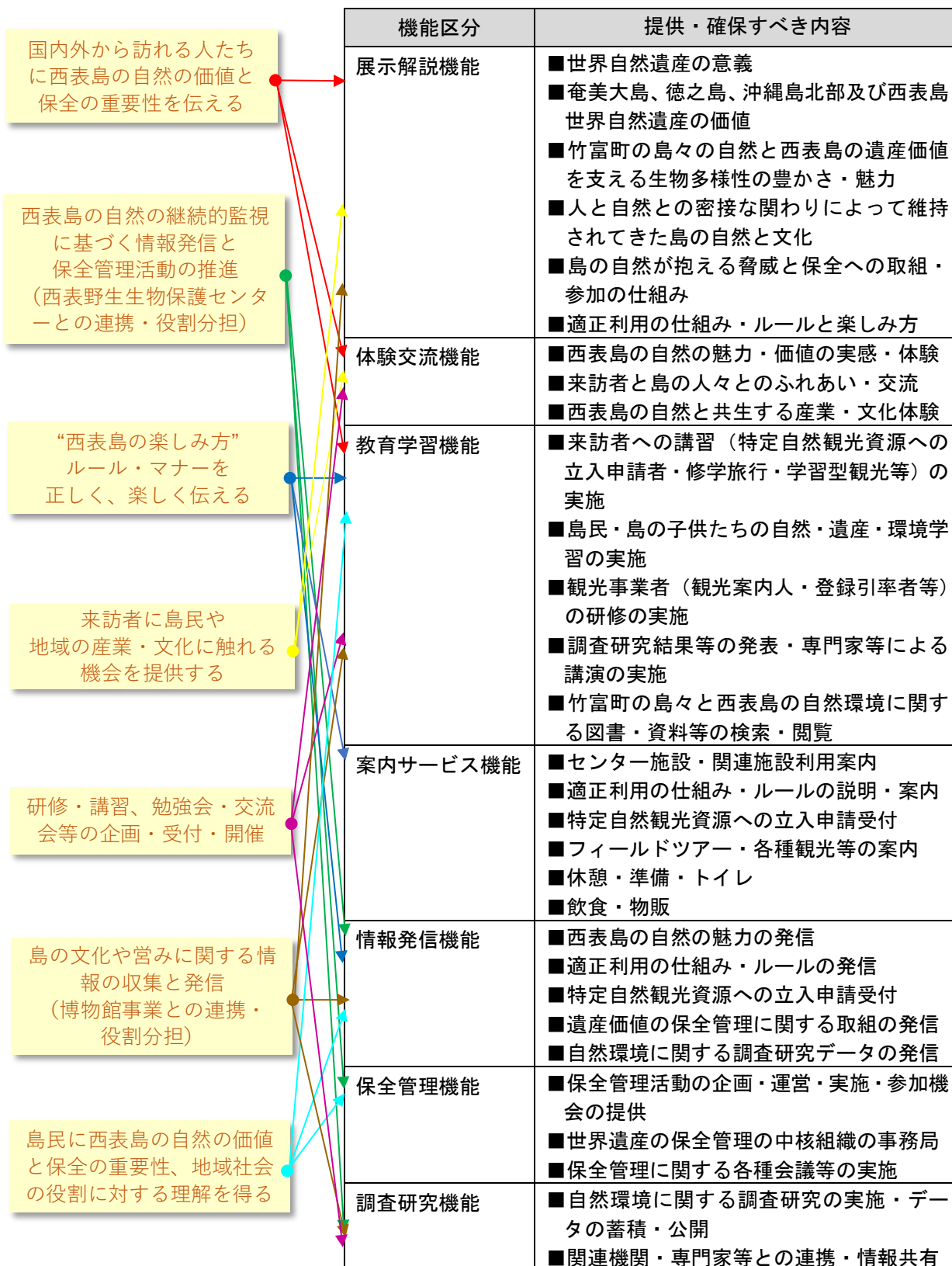
一方、前章までに整理した西表島における世界自然遺産の特性・課題や、観光・地域社会の現況と課題、さらには関連計画の概要や周辺の類似施設との役割分担等を踏まえて、西表島が有する課題を「**生物多様性の確実な保全**」「**適切な観光管理の実現**」「**世界遺産と地域の持続的発展との両立**」の3つに集約し、西表島の世界遺産センターにはこれらの課題解決に資する施設としての役割も期待されることから、上記の世界遺産センターに求められる機能を踏まえつつ、西表島における遺産センターとして求められる役割を以下のとおり整理した。



上記で整理した西表島の世界遺産センターに求められる7つの役割を果たすために、遺産センターに整備すべき施設の機能区分と具体的に提供・確保すべき内容について以下に整理した。

遺産センターに求められる役割

遺産センターに整備すべき施設機能



（２）関連施設との機能分担・連携の考え方

先に整理した世界遺産センターに整備すべき施設機能に関しては、本構想の検討条件から、特に、以下の３つの施設との機能分担・連携について十分な留意が必要である。したがって、基礎調査の結果を踏まえて、３施設との機能分担・連携を前提とした世界遺産センターの機能の絞り込み、必要規模の設定や管理運営のあり方等についての考え方を以下に整理した。

- ① 西表野生生物保護センター：西表島の自然や生物に関する展示解説・調査研究・保全管理機能の有し、環境省が整備・管理する既存施設として、機能分担・連携が必要な施設。
- ② フィールドセンター（仮称）：西表島西部（上原港）からの来訪者を対象とした講習や案内サービス機能を確保するための観光管理の拠点として、将来的に機能分担・連携が必要な施設。
- ③ 竹富町文化振興・観光交流拠点（博物館）：竹富町の９つの島々の文化に関する展示解説・調査研究・保全管理機能の確保を目的として竹富町が整備・管理する新規施設であり、遺産センターと同一敷地内に同時期に整備が予定されている関連施設として、機能分担・連携が必要な施設。

【西表野生生物保護センターとの機能分担・連携の考え方】

機能区分	展示解説	体験交流	教育学習	案内サービス	情報発信	保全管理	調査研究
重複性	○	△	△	×	△	△	○

※重複性 ○：重複性が高い、△：一部重複性がある、×：重複性は低い

●展示解説における留意点

- ・野生生物保護センターの展示改修のテーマは「イリオモテヤマネコから見える「いのちのつながり」と「保全の課題」に気づき、大切にしたいと思う気持ちを醸成する」である。
- ・「イリオモテヤマネコ」は西表島における世界自然遺産の価値を象徴するシンボルでもあり、「いのちのつながり」は遺産価値の生物多様性と同義であり、「保全の課題と意識醸成」といった考え方は、遺産価値の普及啓発上最も重要な観点である。
- ・上記のことから、世界遺産センターで実施すべき展示解説のうち、「西表島の遺産価値を支える生物多様性の豊かさ・魅力」、「島の自然が抱える脅威と保全への取組」に関しては、野生生物保護センターと極めて重複性が高いが、一方で西表島の世界遺産センターとしても最も重要なテーマとして扱うべき内容である。
- ・したがって、伝えたい事は同じであっても、展示解説の表現方法、導入する手法やツール等を工夫することにより、伝え方や伝わり方の違いを明確にすることで双方の施設が補完し合える関係を構築できるよう十分留意する必要がある。

●体験交流における留意点

- ・野生生物保護センターの屋内展示においては、イリオモテヤマネコの視点から自然を見る体験やロードキル・シミュレーターによる体験型展示の導入が検討されているほか、新たに整備されたイリオモテヤマネコ保護収容用の野外ケージを活用したバックヤードツアーや、旧屋外ゲージ周辺の再整備による気軽な自然散策体験の場の確保等の屋外での体験メニューの提供が検討されている。

- ・世界遺産センターに関しては、計画敷地内には他の関連施設の建設が予定されているため、施設周辺の屋外空間の活用ではなく、逆にフィールドではなかなか出会えない、実際には見ることができない、あるいは障害のある方々でも感じられるような創造型の体験を屋内空間に創出する等により、野生生物保護センターとの差別化を図る必要がある。
- ・また、こうした創造型の体験が世界遺産センターを訪れるきっかけや集客ツールとなるような話題性のある企画を検討することが望ましい。

●教育学習における留意点

- ・野生生物保護センターでは、現在での修学旅行生の事前事後の学習等を受け入れており、改修に当たっては、レクチャールームも確保され予定であるが、規模的には60m²・20名収容程度の規模である。
- ・今後は、より多人数での学習型観光の受入や、来訪者や観光事業者を対象とした講習会の恒常的な開催が必要になることが想定されることから、世界遺産センターにはより大きな面積で、しかも大小様々な人数での利用に柔軟に対応できるレクチャールームの確保について検討する必要がある。

●情報発信・保全管理・調査研究における留意点

- ・野生生物保護センターが有する情報発信・保全管理・調査研究に関する機能は、あくまで野生生物保護及び国立公園管理という環境省の所管業務の一環として行われているものであり、そこには世界遺産管理という側面も含まれることとなる。
- ・しかし、西表島における遺産管理にとっては、適正な観光管理の実現が最も大きな課題であることから、現状の野生生物保護センターの機能では十分な対応はできない。
- ・また、世界遺産の管理には環境省だけでなく、林野庁、沖縄県、竹富町等の行政機関や地元関係団体、NPO、事業者、研究者等、多くの関係者が関わっていることから、これらの多様な主体との連携・協働が求められており、管理の中核を担う事務局機能の確保が求められている。
- ・したがって、世界遺産センターの管理運営には、こうした遺産管理の中核となる組織の参画が不可欠であり、当該組織が中心となって、世界遺産センターの情報発信、保全管理、調査研究機能を担っていく体制を確保することが望ましい。

【フィールドセンター(仮称)との機能分担・連携の考え方】

機能区分	展示解説	体験交流	教育学習	案内サービス	情報発信	保全管理	調査研究
重複性	△	×	○	○	△	×	×

※重複性 ○：重複性が高い、△：一部重複性がある、×：重複性は低い

●展示解説・教育学習・案内サービス・情報発信における留意点

- ・フィールドセンター（仮称）に関しては、まだ具体的な整備に向けた検討が進められているわけではないが、世界遺産センターが大原地区に整備される方針であることから、環境省が整備する施設計画（地域整備計画）において、整備位置は今後検討としながらも、「西部地域において遺産地域の適正な利用推進に資する普及啓発・観光管理機能確保等を目的に整備する施設」として位置づけられている。

- ・したがって、世界遺産センターの整備構想の検討においては、西部地区にも来訪者へのインフォメーションを担う（特に教育学習及び案内サービス機能）サテライト施設が整備されることを想定しておく必要がある。
- ・ただし、フィールドセンター（仮称）の整備主体は環境省になることが想定されることから、世界遺産センターの整備主体である竹富町と環境省との間で、事前に十分な調整を行うことにより、これらの2施設が一体的に運営できるような強固な連携体制の確保が必要である。

【竹富町文化振興・観光交流拠点（博物館）との機能分担・連携の考え方】

機能区分	展示解説	体験交流	教育学習	案内サービス	情報発信	保安全管理	調査研究
重複性	△	○	△	○	△	×	×

※重複性 ○：重複性が高い、△：一部重複性がある、×：重複性は低い

●展示解説・教育学習・情報発信における留意点

- ・竹富町文化振興・観光交流拠点（博物館）に関しては、竹富町の島々の歴史や文化、知恵や技の保存、継承、解説、学習、発信等を担う博物館としての機能を有する施設として、世界遺産センターと同一敷地内に同時期に整備が予定されている施設である。
- ・そのため、歴史・文化・暮らしといった人文的分野に関しては博物館が担うこととなるため、世界遺産センターでは自然遺産としての顕著な普遍的価値が認められた生物多様性に特化することで、博物館との重複を出来る限り避ける必要がある。
- ・ただし、竹富町の島々における人と自然との密接な関わりは、島々の自然を理解するうえでの重要な要素であることから、人文的分野との重複も避けられないことから、当該分野を扱う際には、対象の捉え方や表現方法を工夫し、博物館との差別化を図る必要がある。

●体験交流・案内サービスにおける留意点

- ・竹富町文化振興・観光交流拠点（博物館）に関しては、博物館機能に加え、島民同士の交流促進、地域づくりや地域振興の拠点、島民と観光客との交流、観光情報の発信や多様な文化体験プログラムの提供等の事業活動を行う施設としても位置付けられている。
- ・したがって、島民と観光客との交流や観光案内、地域振興に資する本格的な物販・飲食等のサービス機能は主に博物館が担うことを前提として、できる限り重複を避ける必要がある。
- ・そのため、世界遺産センターにおける体験交流・案内サービスとしては、自然に関する体験型展示やフィールド利用の仕組み・ルール案内といった限定的な機能は確保するものの、トイレ・休憩・飲食・物販等については、最低限必要なレベルに留めることとする。

(3) 西表島世界遺産センターの基本理念・基本方針

西表島における世界遺産センターに求められる役割と整備すべき機能を踏まえ、当該センターの基本理念を以下のとおり設定した。

【基本理念】

世界遺産の価値の普及啓発・保全管理の拠点として、
生物多様性のかげがえのなさを伝え、
人々の意識や行動を喚起する

ここでいう「人々」とは、西表島及び世界遺産センターに国内外から訪れる『来訪者』、西表島及び竹富町の島々に住む『島民・町民』、そして西表島や竹富町の島々に興味・関心を寄せる『不特定多数』の人々を対象とする。

そのため、世界遺産センターでは、対象とする各ターゲットの特性に応じて、それぞれ以下に示す方針で働きかけを行うことにより、その理念達成を目指すこととする。

【基本方針】

ターゲット	生物多様性のかげがえのなさの伝え方	喚起すべき意識・行動
『来訪者』	● 圧倒的な生物多様性の豊かさを実感 ● 世界でここだけにしかない珍しい生き物の不思議な生態を知る ● 島の自然の脆さ、奇跡的に残されたことの意義を知る ● 生物との出会いの予感、わくわく感を演出 ● 観光が与える自然や地域社会への負荷と効用	➤ 世界遺産の島という特別な場所を訪れたという認識 ➤ 竹富町、世界遺産の他の島々にも行ってみたい ➤ 責任ある観光のためにすべきこととしてはいけないこと ➤ また来たい、もっと知りたい、何か役に立ちたい ➤ 保全管理に対する費用負担の必要性
『島民・町民』	● 自分の身の回りに多くの珍しい生き物がいることへの気づき・驚き ● 島民にとっては身近な自然が世界遺産になった理由を知る ● 島の暮らしと自然との関係性、お互いに影響し合っている実態を知る ● 今、起きている脅威の実態を知り、取組の重要性を理解する	➤ 島の自然が世界遺産として認められたことを誇りに思う ➤ 島の自然が大好きだから大切に残したい ➤ 島の自然のことをもっと深く知りたい ➤ 島民の力で島の自然を守りながら共に生きていきたい ➤ 自分のできる事を考え、保全管理活動に参加する
『不特定多数』	● 世界遺産としての価値の科学的データによる証明と分かりやすい解説 ● 美しい・臨場感のある・珍しい映像 ● 日々更新されるタイムリーな情報 ● 保全管理の取組の継続と効果 ● 来訪者・島民等から寄せられた意見やコメント	➤ 世界遺産の島に行ってみたい ➤ 西表島や竹富町、世界遺産の島々のことをもっと知りたい ➤ 自然への影響・負荷の少ない方法で観光したい ➤ 世界遺産の価値を守る取組を応援したい・協力したい

2) 施設整備方針

(1) 諸室の構成及び規模算定

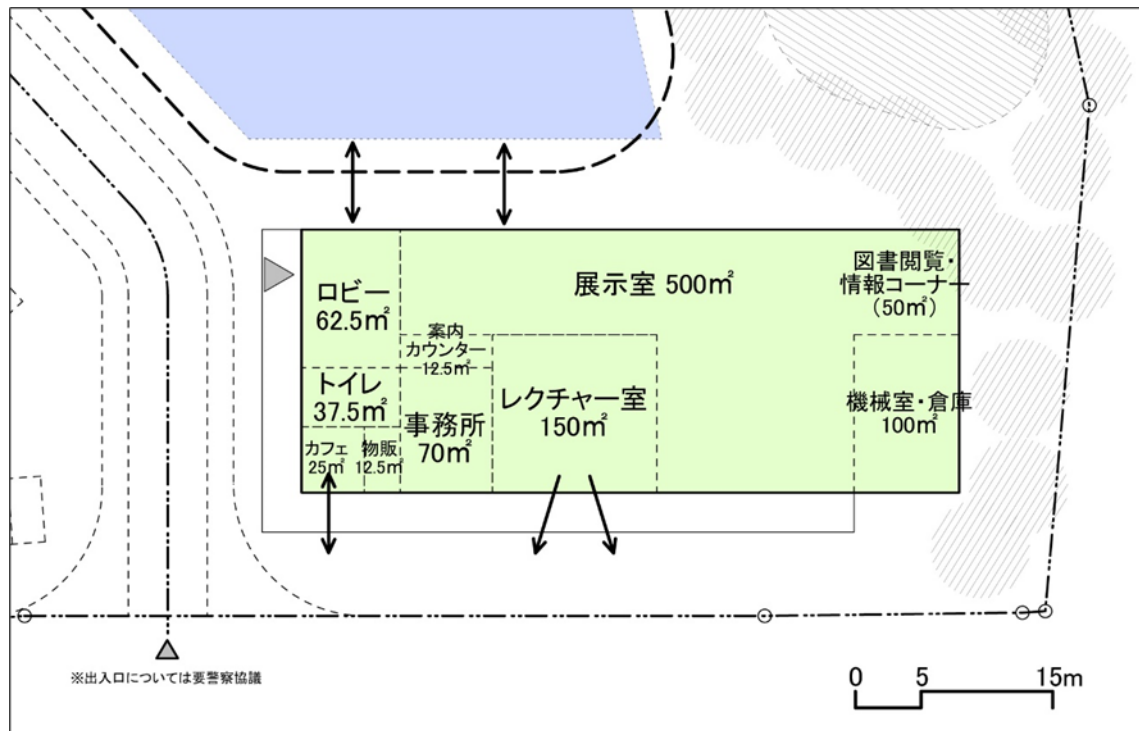
世界遺産センターに求められる機能を実現するため、環境省自然公園等施設技術指針における博物展示施設（ビジターセンター等）に示されているスペース構成と規模算定の基準を踏まえて、諸室の構成・規模を以下のとおり設定した。

機能区分	提供・確保すべき内容	諸室の構成	規模算定
展示解説機能	■世界自然遺産の意義 ■奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島世界自然遺産の価値 ■竹富町の島々の自然と西表島の遺産価値を支える生物多様性の豊かさ・魅力* ■人と自然との密接な関わりによって維持されてきた島の自然と文化* ■島の自然が抱える脅威と保全への取組・参加の仕組み* ■適正利用の仕組み・ルールと楽しみ方	展示室	500m ² ※環境省・自然公園等施設技術指針第4章ビジターセンターより規模を算出。展示室は最大時利用人数を80人（大型バス2台）と想定する。また、ビジターセンターにとって展示室最も重要なスペースの一つであり、展示計画と調整し十分な面積を確保する必要があるため、4～5 m ² の単位規模×1.25とする。図書閲覧・情報コーナーを含む。
体験交流機能	■西表島の自然の魅力。価値の実感・体験 ■来訪者と島の人々とのふれあい・交流* ■西表島の自然と共生する産業・文化体験*		
教育学習機能	■来訪者への講習（特定自然観光資源への立入申請者・修学旅行・学習型観光等）の実施 ■島民・島の子供たちの自然・遺産・環境学習の実施 ■観光事業者（観光案内人・登録引率者等）の研修の実施 ■調査研究結果等の発表・専門家等による講演の実施 ■竹富町の島々と西表島の自然環境に関する図書・資料等の検索・閲覧	図書閲覧・情報コーナー レクチャールーム	(50 m ²) ※上記の展示室算定面積に含む。 150 m ² ※標準規模による手法を基に算出する場合、80 m ² となる。さらに当施設の想定される利用頻度等を加味し×1.875とする。
案内サービス機能	■世界遺産センター案内・関連施設利用案内* ■適正利用の仕組み・ルールの説明・案内 ■特定自然観光資源への立入申請受付 ■フィールドツアー・各種観光等の案内* ■休憩・準備・トイレ（最小限規模）* ■飲食・物販（最小限規模）*	ロビー 案内カウンター トイレ カフェ 物販	62.5 m ² 標準規模×1.25 12.5 m ² 標準規模×1.25 37.5 m ² 標準規模×1.25 25 m ² 標準規模×1.25 12.5 m ² 標準規模×1.25
情報発信機能	■西表島の自然の魅力の発信 ■適正利用の仕組み・ルールの発信 ■特定自然観光資源への立入申請受付 ■遺産価値の保全管理に関する取組の発信 ■自然環境に関する調査研究データの発信	事務室	70 m ² ※館長1名、事務局長1名、担当6名、補助職員4～6名を想定。館長・事務局長は担当を兼務するため、換算人員換算率より、(10+2.5+4)×4 m ² =66 m ² 。また、湯沸室約5 m ² を付属面積として加える。
保全管理機能	■保全管理活動の企画・運営・実施・参加機会の提供 ■世界遺産の保全管理の中核組織の事務局 ■保全管理に関する各種会議等の実施		
調査研究機能	■自然環境に関する調査研究の実施・データの蓄積・公開 ■関連機関・専門家等との連携・情報共有	機械室・倉庫	100 m ²
管理機能	■センターを運営・管理する拠点 ■施設の維持・メンテナンスに必要な資材等を保管する		
施設面積（合計）			970 m ²

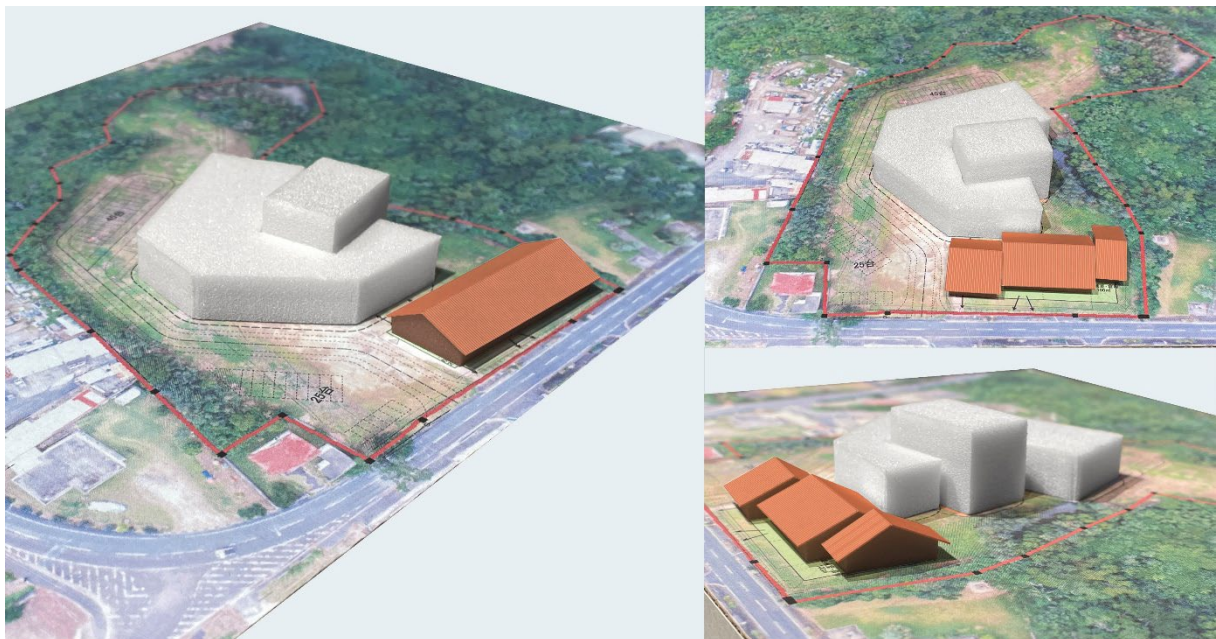
※：関連施設との機能分担を前提として、機能の絞り込みを行った項目及び内容検討・規模設定における配慮が必要な項目。案内・サービス機能については、関連施設と共有することで全体的な規模縮小は可能である。

■世界遺産センター平面構想図

- ・諸室の構成に基づき平面構成を検討。
- ・施設エントランスは駐車場、他施設との位置関係により決定する必要がある。
- ・展示室（資料・図書コーナーを含む）を北側に配置することで、他施設との連携が可能となる。
今後の検討において、展示空間と他施設の位置づけを検討する必要がある。
- ・地域での利用が想定されるレクチャー室は南側へ配置することにより、開放性を確保するとともに、単独での運用も可能となる。



■世界遺産センター整備イメージ図



〔ボリューム配置イメージ〕

〔分棟ボリューム配置イメージ〕

(2) 展示イメージ

① 展示の基本的な考え方

世界遺産センターとして、求められる機能を実現したうえで、魅力ある施設整備を推進するための展示の基本的な考え方を以下のとおり整理した。

➤ 西表島の世界自然遺産としての魅力に感動し、理解を深め、行動につなげる展示

- ◆ 世界中から訪れる来館者にとって魅力的で感動を与える施設
- ◆ 学びや気づきを与え、再訪問や保全活動への協力等の行動につなげる展示

➤ 保全の重要性を共有し、保全活動の推進拠点となる

- ◆ 地域の人たちと来館者がともに保全の重要性を理解・共有する
- ◆ 西表の貴重な自然の保全への1歩を踏み出す
- ◆ 保全活動の継続を支援する

② 展示のシナリオ

感動と理解、そして行動へとつなげるため、来館者の目線に立ち「奄美大島。徳之島、沖縄島北部及び西表島」の世界自然遺産としての価値、西表島の遺産価値を支える生物多様性の豊かさ・魅力について自発的、能動的に学べる展示とする。

西表島の生物多様性を末永く未来に継承していくために、来館者一人ひとりにできる取り組みや行動があることを伝える。

感動と理解を行動へ

展示
解説
機能

i. おどろき、 気づく

- 世界にも稀な、亜熱帯・多雨な気候がもたらす生物多様性
- 世界自然遺産の意義
 - 「奄美大島。徳之島、沖縄島北部及び西表島」の世界遺産登録概要
 - 映像シアター「西表島 自然のワンダー」等

ii. 探り、 知る

- 生物多様性が保たれている理由、生き物たちのかかわり
- 生物多様性の成り立ち
 - 石西礁湖と竹富町の島々の自然
 - 西表島の遺産価値を支える生物多様性の豊かさ・魅力

iii. 守り、 つなぐ

- 自然界の一員としての人、くらし
- 自然と人のかかわり
 - 生物多様性の保全に関わる課題と取り組み
 - 適正利用の仕組み・ルールと楽しみ方 等

体験
交流
機能

iv. 共有し、 行動する

- 生物多様性の保全に向けての行動
- 多様なテーマでの企画展
 - 資料を活用した学習体験
 - ギャラリートークの開催 等

i. おどろき、気づく：世界にも稀な、亜熱帯・多雨な気候がもたらす生物多様性

●世界自然遺産の意義

- ・世界遺産条約、世界自然遺産登録の条件、4つの評価基準（クライテリア）等について紹介する。
- ・日本国内の世界自然遺産登録地について紹介する。

●奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島世界自然遺産の価値

- ・「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」は4つの地域で構成された世界自然遺産で、4つの評価基準のうち、「クライテリア（x）生物多様性と絶滅危惧種」を満たすものであることを紹介する。
- ・4つの地域に共通する世界自然遺産の価値として、下記を紹介する。
 - ◇特異な地史によって生物多様性に富んだ独自の生態系の成立
 - ◇地球規模でここにしかない生きものの宝庫（世界のホットスポット）
 - ◇4つの地域それぞれの紹介と遺産価値を代表する生き物

●映像シアター「西表島 自然のワンダー」

- ・西表島の自然と多様な生物を映像でわかりやすく紹介するガイダンスシアターを展開する。没入感のある映像や、生き物たちの息づかいを体感できる臨場感あふれる音響演出等を導入し、西表島の自然のワンダーに引き込む。

ii. 探り、知る：生物多様性が保たれている理由、生き物たちのかかわり

●生物多様性の成り立ち

- ・「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」世界自然遺産は琉球列島の分離・結合が繰り返された結果、島嶼間での種分化が進行し、依存固有種や新固有種などが生存する独特の生物相であることを紹介する。

●石西礁湖と竹富町の島々の自然

- ・石垣島と西表島の間に広がる石西礁湖のサンゴ礁は、我が国最大規模のサンゴ礁であり、400種を超える造礁サンゴが分布する種の多様性の高い海域であること、高島と低島からなる竹富町の島々の多様な自然環境の基底となっていることを紹介する。

●西表島の遺産価値を支える生物多様性の豊かさ・魅力

- ・亜熱帯で多雨の環境が育んだ豊かな森と、そこに生息する多様な生き物の魅力を実物大の資料や標本、映像や音響を盛り込んだ複合的な演出、環境再現展示等による参加体験型の展示で紹介する。
- ・のぞき込む、めくって見る、感触を確かめる等、来館者の五感を使って、生き物の特徴や生態を探る。

iii. 守り、つなぐ：自然界の一員としての人、暮らし

●人と自然のかかわり

- ・先人たちは、島の資源を大切にしながら、自然や生き物と長く共生してきた。現在に継承されている、四季の自然と農耕・祭祀の関わり等から、自然と向き合ってきた先人の知恵を知る。

●生物多様性の保全に関わる課題と取り組み

- ・外来種対策、違法採取対策、希少種の交通事故等の防止など、生物多様性の保全に向けた課題と取り組みを紹介する。

●適正利用の仕組み・ルールと楽しみ方

- ・持続的な観光利用の推進に向けた利用コントロールやルール、ガイド事業者の育成、登録・認証制度、管理計画などを紹介する。
- ・フィールドへの人数制限、季節・時間の制限、触らない・餌をやらないなど野生生物との接し方、ゴミの持ち帰り、水やエネルギー資源の無駄遣い防止等、西表島への旅行者に対して行動ルールを掲示し、啓蒙する。

iv. 共有し、行動する：生物多様性の保全に向けての行動

●多様なテーマでの企画展

- ・多様な生物の生態を紹介する映像・写真展、西表島の四季の絵画展、保全活動の最新情報展示等、生物多様性保全への意識を高める企画展を計画する。
- ・生物多様性の保全に向けて、来館者一人ひとりの思いをメッセージで残したり、実践した行動がわかる記録ノートを設置する等、みんなの声が集まるメッセージスポットにより、行動の成果を共有する。

●資料を活用した学習体験

- ・仲間川の水質を顕微鏡で観察する、植物の種子を見て生息エリアを当てる、各種の樹皮の実物にハンズオンする等、各種の資料や模型等を活用して西表島の自然とふれあい、自然環境の保全につながる学習体験を提供する。

●ギャラリートークの開催 等

- ・フィールドガイドによる展示説明、生物多様性保全のための行動を促すトークショー、地域の人々と来館者がふれ合うミニ催事等、交流機会を創出する。

③ 展示のコンセプト

展示の基本的な考え方やシナリオ（流れ）をふまえ、展示のコンセプトと構成を整理する。

展示のコンセプト

西表 THE WONDER !

奇跡の島・西表の驚異・不思議を体感、共有し、
ともに未来へ守り残していこう

コンセプトの考え方

西表島のどこが、何がすごいのか、素晴らしいのか？
なぜ世界自然遺産となったのか？
国内外の世界自然遺産と比べてどのような違いがあるのか？
西表島を訪れることで、何を発見し、体験しすることができるのか？
この稀有な宝を守っていくために、何ができるのか？

西表島の奇跡と驚異の発見と体感を通して、まず心を動かし、さらなる関心、そして行動につなげる。

「すごい！」「素晴らしい！」から「なぜ？」「どうして？」「どのように？」へ。

西表島の魅力と不思議を直感的に伝えるビジュアル、見る（視覚）だけでなく聞く（聴覚）、感じる（触覚）など、来館者の感性にうったえる展示、わくわくするような参加体験型の手法等を用いて、西表島の「ワンダー」に最初に出会う場所となる。

西表島の「ワンダー」の秘密は「共有・共生」。それを体感し、理解することで、自然と「どのようにこのワンダーを守っていくか」という行動につなげていく。

④ 展示構成案

次頁に展示シナリオ、コンセプトをふまえた展示構成案をまとめる。

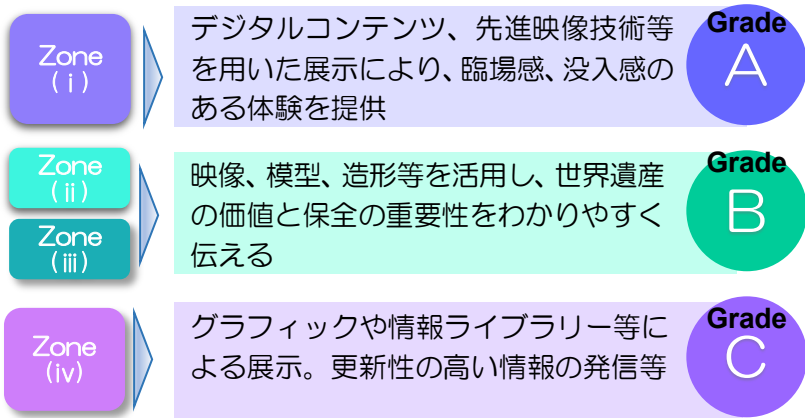
西表島世界遺産センター 展示構成案						
	大項目		中項目	ねらい・内容	主な手法(案)	備考
1	導入展示	1-1	サウンドスケープ 奇跡と驚異の島・西表島	西表島の森の生きものたちの鳴き声、風の音、せせらぎの音など、自然が奏でる音を臨場感あふれる音響演出で聴かせることで、展示に引き込む。	・サウンドスケープシアター ・音の回廊(演出回廊)	建築等の条件に合わせ、シアター/回廊を検討
2	おどろき、気づく： 世界にも稀な、亜熱帯・多雨な気候がもたらす生物多様性	2-1	世界自然遺産の意義	世界遺産条約、世界自然遺産登録の条件、4つの評価基準(クライテリア)等について紹介する。 日本国内の世界自然遺産登録地について紹介する。	・解説グラフィック	
		2-2	奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島世界自然遺産の価値	「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」は4つの地域で構成された世界自然遺産で、4つの評価基準のうち、「クライテリア(x)生物多様性と絶滅危惧種」を満たすものであることを紹介する。	・解説グラフィック ・登録証(写し)	
		2-3	西表島のすがた	西表島の森、川、生きものの、朝・昼・夜の景観や、空から、地面からなど、多様な視点からの姿を、圧倒的なビジュアルで紹介する。グラフィックによる空間演出とあわせ、ドローン映像によるスピード感あふれる体感映像などとしても紹介。 また、竹富町の島々の触れる模型を用意し、西表島の地勢、地形の特徴を触って把握できるようにする。	・ドローン映像 ・演出グラフィック ・触れる島地形模型	
		2-4	数字で見る西表島	年間の気温、降水量、湿度、川の数、確認されている生きものたち(動植物)の種類、生息数、ロードキル等の被害件数、観光客数、島の人口等、数字を通して西表島を知る。 ゲームのような体験コンテンツなどとして、展示全体を通して数字を答えていき、達成感を感じられるような手法も検討する。	・解説グラフィック ・体験ゲーム型コンテンツ (ワークシート/アプリ等)	
		2-5	西表島のジオ・ヒストリー	西表島がどのように形成されたのか、それにより自然や生きものたちがどのように進化してきたのかを紹介する。数万年かけて形成された稀有な自然が、数百年という人間の関わりの中でどのように影響を受けているかを紹介する。	・解説グラフィック ・演出グラフィック	
		2-6	映像シアター 「西表島 自然のワンダー」	西表島の自然と多様な生物を映像でわかりやすく紹介するガイダンスシアターを展開する。没入感のある映像や、生き物たちの息づかいを体感できる臨場感あふれる音響演出等を導入し、西表島の自然のワンダーに引き込む。	・シアター	
3	探り、知る： 生物多様性が保たれている理由、生き物たちのかかわり	3-1	生物多様性の成り立ち	「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」世界自然遺産は琉球列島の分離・結合が繰り返された結果、島嶼間での種分化が進行し、依存固有種や新固有種などが生存する独特の生物相であることを紹介する。 精緻・精密な生態系の関係性を楽しみながら理解する。	・解説グラフィック ・演出グラフィック ・西表島BIOジグソーパズル(パネル式)	
		3-2	石西礁湖と竹富町の島々の自然	石垣島と西表島の間に広がる石西礁湖のサンゴ礁は、我が国最大規模のサンゴ礁であり、400種を超える造礁サンゴが分布する種の多様性の高い海域であること、高島と低島からなる竹富町の島々の多様な自然環境の基底となっていることを紹介する。 グラフィック等による解説に加え、ドローン映像による各島を数分で巡る、スピード感あふれる体感映像などとしても紹介。	・ドローン映像 ・解説グラフィック ・演出グラフィック	
		3-3	西表島の遺産価値を支える生物多様性の豊かさ・魅力	亜熱帯で多雨の環境が育んだ豊かな森と、そこに生息する多様な生き物の魅力を実物大の資料や標本、映像や音響を盛り込んだ複合的な演出、環境再現展示等による参加体験型の展示で紹介する。 のぞき込む、めくって見る、感触を確かめる等、来館者の五感を使って、生き物の特徴や生態を探る。	・生物多様性ジオラマ ・サウンドスケープ ・プロジェクションマッピング ・触れる生きもの模型 (イリオモテヤマネコ、リュウキュウイノシシ、カンムリワシ等のリアルな触感、サイズの模型)	既存の剥製等の活用

4	守り、つなぐ： 自然界の一員としての人、くらし	4-1	人と自然のかかわり	先人たちは、島の資源を大切にしながら、自然や生き物と長く共生してきた。現在に継承されている、四季の自然と農耕・祭祀の関わり等から、自然と向き合ってきた先人の知恵を知る。	・解説グラフィック ・映像	竹富町文化振興・観光交流拠点の展示との内容整合
		4-2	生物多様性の保全に関わる課題と取り組み	外来種対策、違法採取対策、希少種の交通事故等の防止など、生物多様性の保全に向けた課題と取り組みを紹介する。 西表の自然環境の映像や写真と、生物多様性を脅かすものなどを合わせて展示し、危機と課題を直観的に感じられるようにするなど、感性にうったえる見せ方を行う。	・解説グラフィック ・映像 ・生物多様性の保全と適正利用のルールのインストール	
		4-3	適正利用の仕組み・ルールと楽しみ方	持続的な観光利用の推進に向けた利用コントロールやルール、ガイド事業者の育成、登録・認証制度、管理計画などを紹介する。 フィールドへの人数制限、季節・時間の制限、触らない・餌をやらないなど野生生物との接し方、ゴミの持ち帰り、水やエネルギー資源の無駄遣い防止等、西表島への旅行者に対して行動ルールを掲示し、啓蒙する。	・解説グラフィック ・演出グラフィック	
		4-4	ワクション・プラン	ワンダーを守るためのアクションを「ワクション・プラン」としてカード化。来館者は3枚、カードを引くことができ、西表島の滞在、観光においてその行動を守るように提案する。	・アクションプランカード	

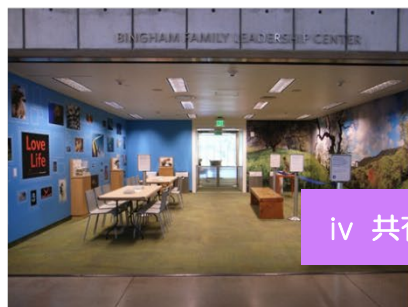
⑤ 展示室のゾーニングと整備イメージ

展示室のゾーニング・動線及び各ゾーンの整備イメージを示す。

各ゾーンの内容、狙いを実現するための展示手法は大きく3段階での展開を想定



i おどろき、気づく



iv 共有し、行動する



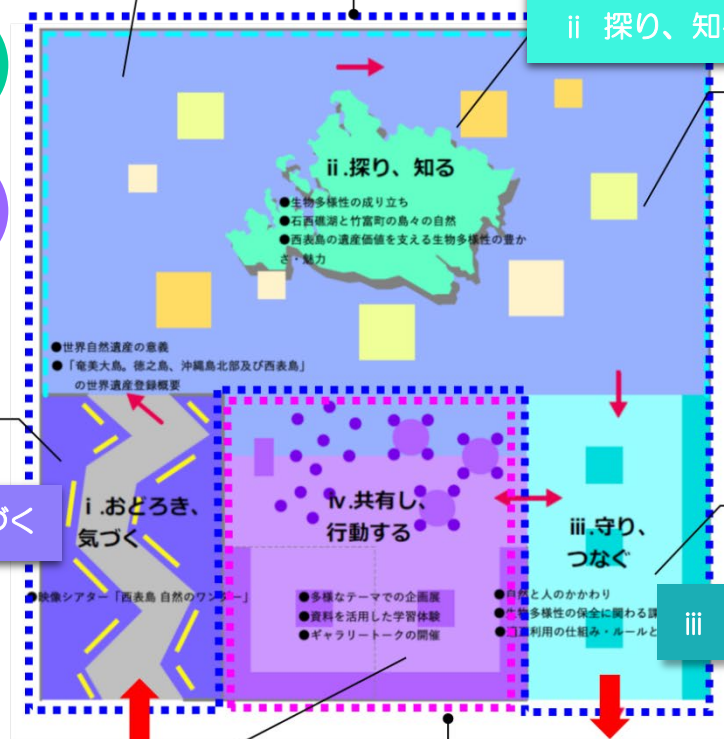
展示解説機能



ii 探り、知る



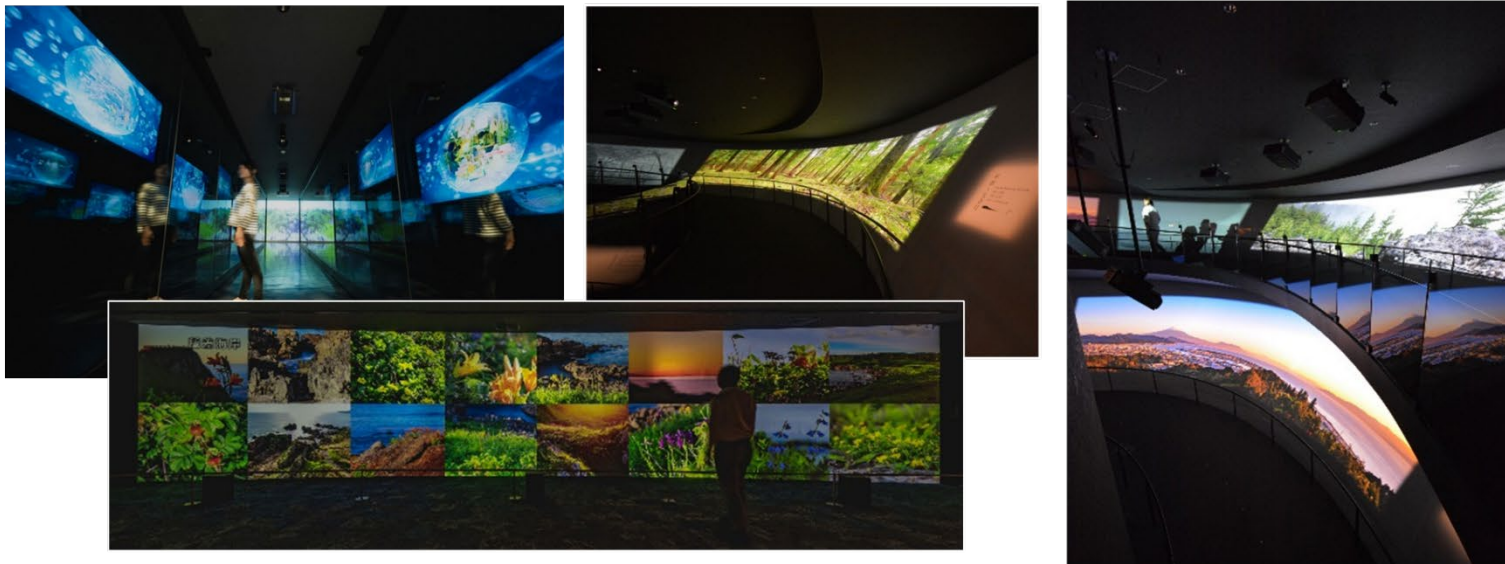
iii 守り、つなぐ



Zone(i) “おどろき、気づく”

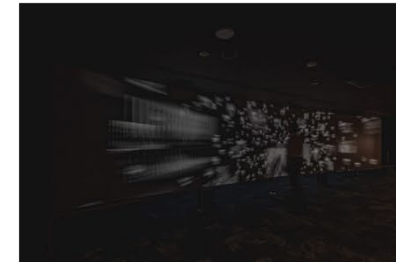
世界にも稀な、亜熱帯・多雨な気候がもたらす生物多様性
映像シアター「西表島、自然のワンダー」

ウォークスルーで視点の高さの変化を演出。地表面、水面⇄水中等
現れは消える生き生きとした生物たちのようすをとらえた画像（映像）※鈴木直樹氏写真等
音の演出、風の演出を加え、体感性の高い演出。
最後視点をあげて明るく、次の展示へと続く。



映像シアター 多種多様な生物の住みかである西表島。自然の中に分け入っても広く深い森の中にいる生きものを肉眼で見ることは簡単ではない。ロボットカメラを使って撮影された写真等の活用を検討し、解説を加え生きものたちの生き生きとした動きとその生態を紹介する。

単純な一枚写真として使うのではなく、黒背景を利用し、写真の特徴に合わせて、画面の出現位置を変え、森の中で動物を探すように、見る人の視線を動かす大画面スクリーン映像。音響も映像に合わせ、右から動物が来た時は、右から左へと動くサラウンド音響とし、森の中に潜み動物観察をしているかのような、臨場感を創出する。ロボットカメラでの撮影機材や環境についても併せて紹介する。



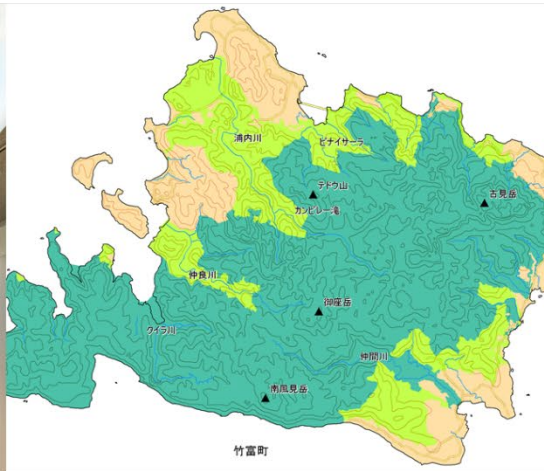
西表

Zone (ii) 探り、知る

生物多様性が保たれている理由、生き物たちのかかわり

さまざまな視点、視野で得られる情報を紹介する。

地球⇄八重山地域⇄竹富町⇄西表島全体のマップ（航空写真）⇄各地形の切りとり⇄原寸⇄拡大

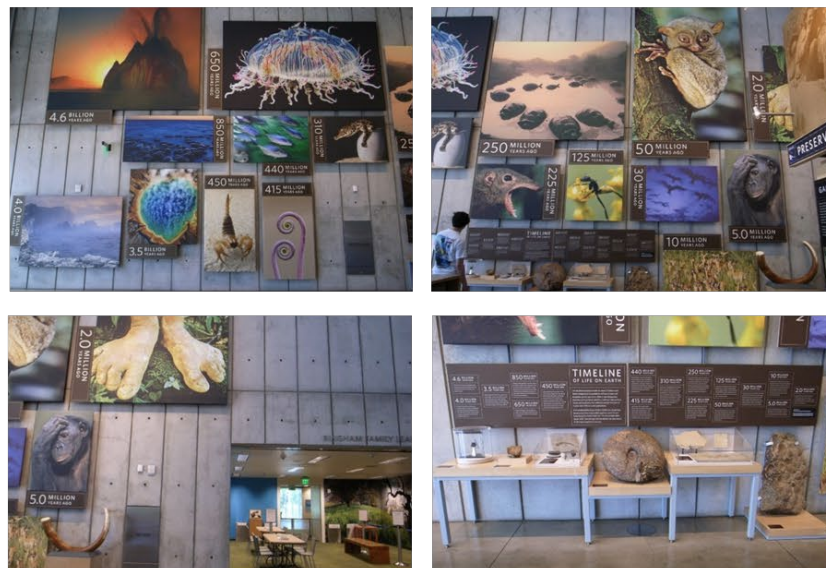


西表

Zone (ii) 探り、知る

生物多様性が保たれている理由、生き物たちのかかわり

数字+ビジュアルで西表島の生物多様性を伝える



テーマ毎にブース、ボックスで紹介



ジオラマ

望遠鏡をのぞくと、
ヤマネコや昆虫の視線で森の多様な生きものたちの様子が・・・

剥製展示

西表島の自然を模した背景壁紙。その前に剥製を展示
剥製はケース無しで展示したい

石西礁湖と竹富町の自然

(5分でめぐる) 石西礁湖と竹富町の自然

石垣島と西表島の間に広がる「石西」礁湖。

その海域にある竹富町の島々。特異な自然環境を持つ、島嶼の町を衛星写真やドローン、アクションカメラ等を用いて撮影された主観映像により紹介する。上空から見ることで各島の特徴的な形状を、スピード感のある主観映像で島内を紹介。隆起サンゴ礁の平坦な低島の島々と豊かな緑と山のある高島の西表島の違いを見ることで、竹富町の島々の自然の豊かさを実感する。

Zone (iii) 守り、つなぐ

自然界の一員としての人、暮らし



生物多様性の保全と適正利用のルール インストール

西表の自然環境を大きく映した写真や映像を背景に、西表島の生物多様性を脅かす要因を展示。実物で臨場感を出し、写真の世界ではないことを示す。

漂流ゴミやロードキル問題など生物多様性を阻害するものの展示



西表島 ネイチャーカード

遊び感覚で西表の自然を学ぶカードゲーム。西表島の自然にまつわるカードが裏返されていて、それを3枚選んでもらう。カードには希望の言葉も添えられている。選んだカードは、あなたのカードとして、プリントアウトしたものを持ち帰ってもらえる。(もしくは画像データがもらえる)



西表

Zone (iv) 共有し、行動する

生物多様性の保全に向けての行動



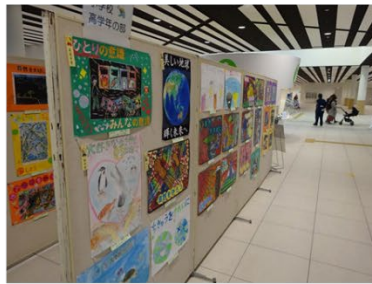
ネイチャーガイドによるギャラリートーク



活動が見えるラボ（研究室）



展示と一体となった研修室



町民参加による西表島の自然に関する絵画展



水質や魚などに関する体験学習（ミニワークショップ）



さが維新博「ことのは」



ビーチコーミング、海中プラスチックゴミ等の現況を伝える企画展示



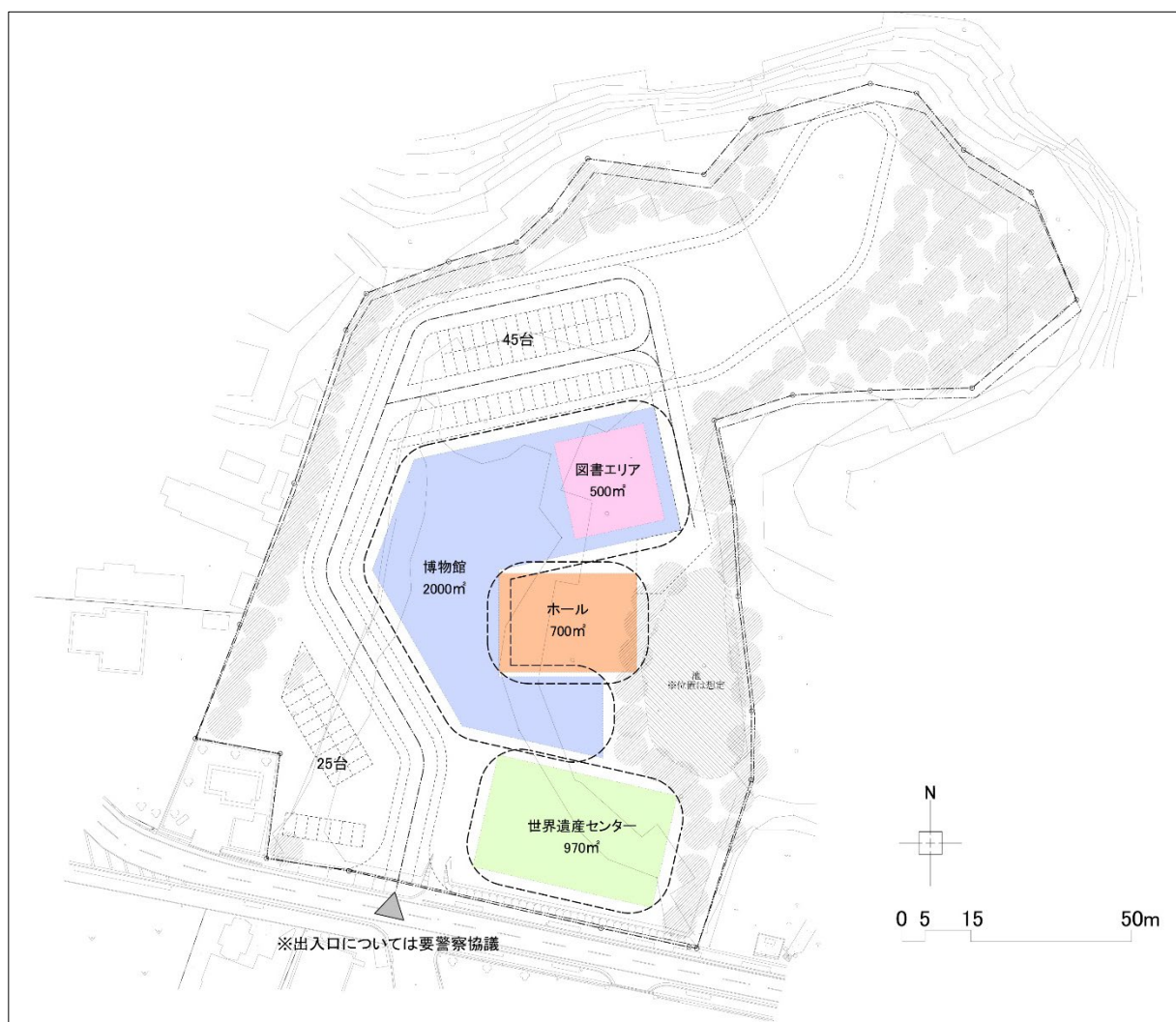
西表

(3) 敷地内の施設配置(案)

世界遺産センターの施設規模を 970 m²とした場合、想定される敷地内での配置検討を行った。なお、施設配置に関しては、別途、併行して検討されている大原庁舎整備基本計画との整合を図る必要があることから、以下の検討は、あくまで先に検討した敷地条件を踏まえて、世界遺産センターとして設定した規模の施設配置として望ましいと考えられる案を検討したものである。

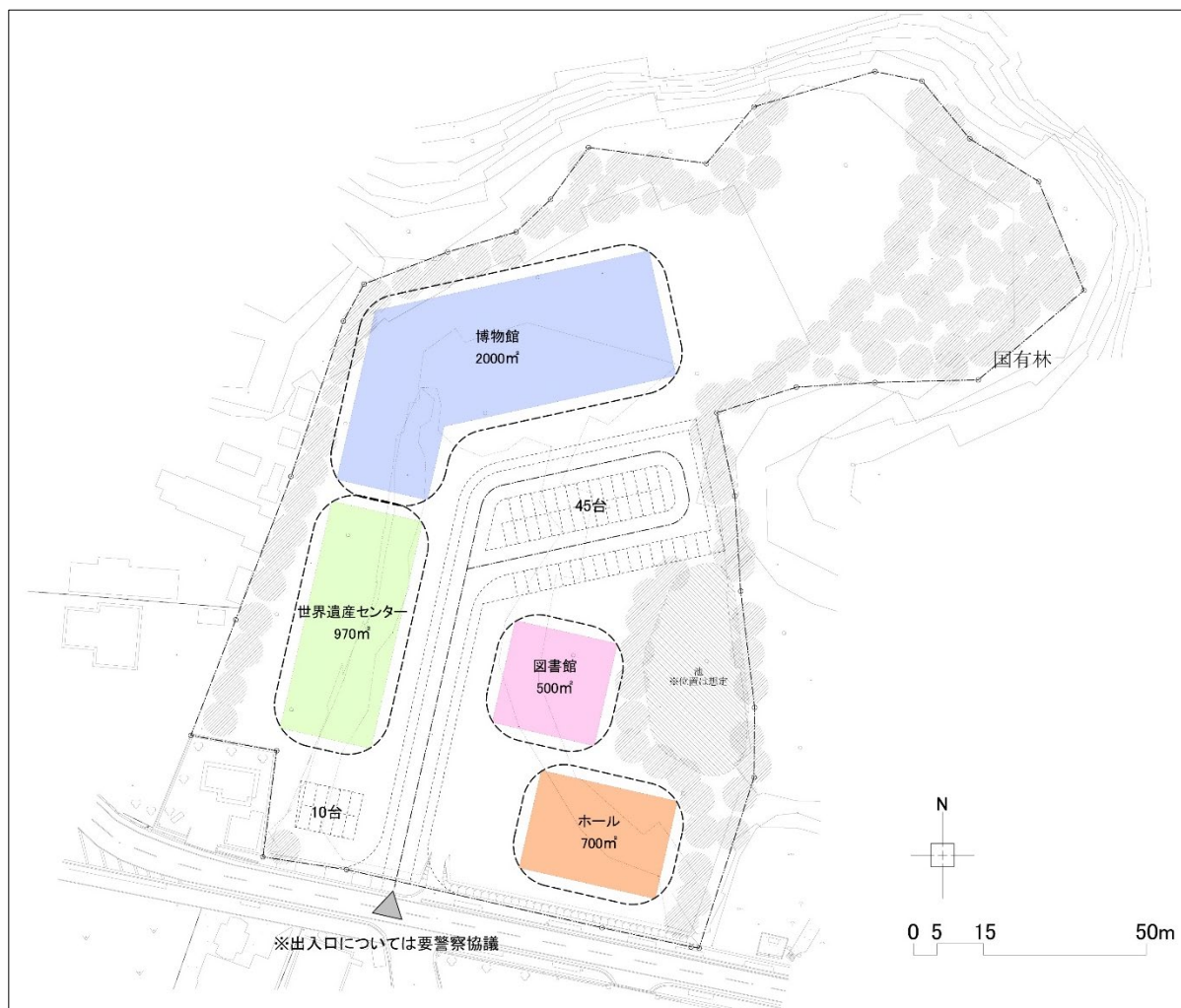
■配置案 A

- ・博物館とホール・図書館機能を一体施設とした際の配置計画案。
- ・西側への眺望を確保するために建物高さが高くなることが予想されるホールを敷地東側に配置。
- ・世界遺産センターは地域の利用もしやすい、敷地南側へ配置。
- ・世界遺産センターが先行運用される可能性もある為、施設全体の顔となる。



■配置案B

- ・ 博物館と図書館・ホールを分離した配置案。
- ・ 機能的な親和性の高い世界遺産センターと博物館を西側に配置。
- ・ 世界遺産センターと博物館を低層に抑えることで、景観計画へ配慮した計画とする。
- ・ 利用者の属性によっては、博物館+図書館とすることも検討が必要
- ・ 搬入動線の確保は比較的容易となる



(4) 施設整備上の課題・留意点

① 関係行政機関との綿密な調整と早期事業化の必要性

- ・世界遺産センターは、世界遺産の価値の普及啓発と保全管理の拠点としての役割を担う施設であることから、我が国の他の世界自然遺産地域においては、これまで環境省が世界遺産センターを整備し、都道府県や市町村は、環境省が整備した世界遺産センターと連携するかたちで、特に来訪者への展示・解説機能や案内・サービス機能を補完・強化する施設を整備してきた。
- ・しかし、奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島世界自然遺産は、連続性のある資産として世界自然遺産に登録され、世界遺産地域も2県12市町村に及ぶ4つの島に分散していることから、これまでのように世界遺産センターも1か所ではその機能の確保が困難となっている。
- ・一方、西表島においては、世界遺産登録に際しての課題として観光管理の強化と早急な対策が強く要請されており、現在、国、県、町が一体となって具体的な対応策の検討を進めており、他の地域にも増して地元自治体である竹富町の遺産管理への主体的関与が求められている。
- ・このような状況から、西表島においては竹富町が環境省に代わって、別途「沖縄振興特定事業推進費市町村補助金」を活用し、世界遺産センターの整備に取り組むこととなった。
- ・したがって、今後、世界遺産センター整備の具体化に向けた基本計画、基本設計、実施設計の検討に当たっては、「世界遺産センター」の名称やエンブレムの使用も含めて遺産管理に関わる関係行政機関から求められる条件との綿密な調整と、関連する制度の運用開始時期と連動した早期事業化が求められることに留意が必要である。

② 施設整備に伴う環境負荷・景観影響への厳しい評価

- ・世界遺産センターは遺産価値である西表島の豊かな自然環境、生物多様性の保全のシンボルとなる施設であり、来訪者のみならず地域住民や観光事業者、さらには自然保護意識の高い不特定多数の人々の興味・関心を集める可能性が高い。
- ・そのため、施設整備に伴う環境負荷や周辺の自然景観への影響については、多方面からの厳しい評価の視線が注がれることから、他の施設よりも慎重な対応やきめ細かな配慮が求められる点に留意が必要である。

③ 施設の維持管理費による財政負担の軽減

- ・世界遺産センターは同一敷地内に整備が予定されている博物館、ホール、図書館と異なり、住民サービスの向上が主目的の施設ではないことから、施設の維持管理費による財政負担については、町民からみれば来訪者のための施設を町民が負担するという意識になりやすい。
- ・そのため、今後、施設規模や設備導入を具体的に検討するにあたっては、維持管理費を極力低減する方向で検討していくことが強く求められる。
- ・一方で、世界遺産センターの維持管理費に関しては、主な利用者である来訪者や遺産管理に関わる関係行政機関にも応分の負担を求めることについても、合わせて検討する必

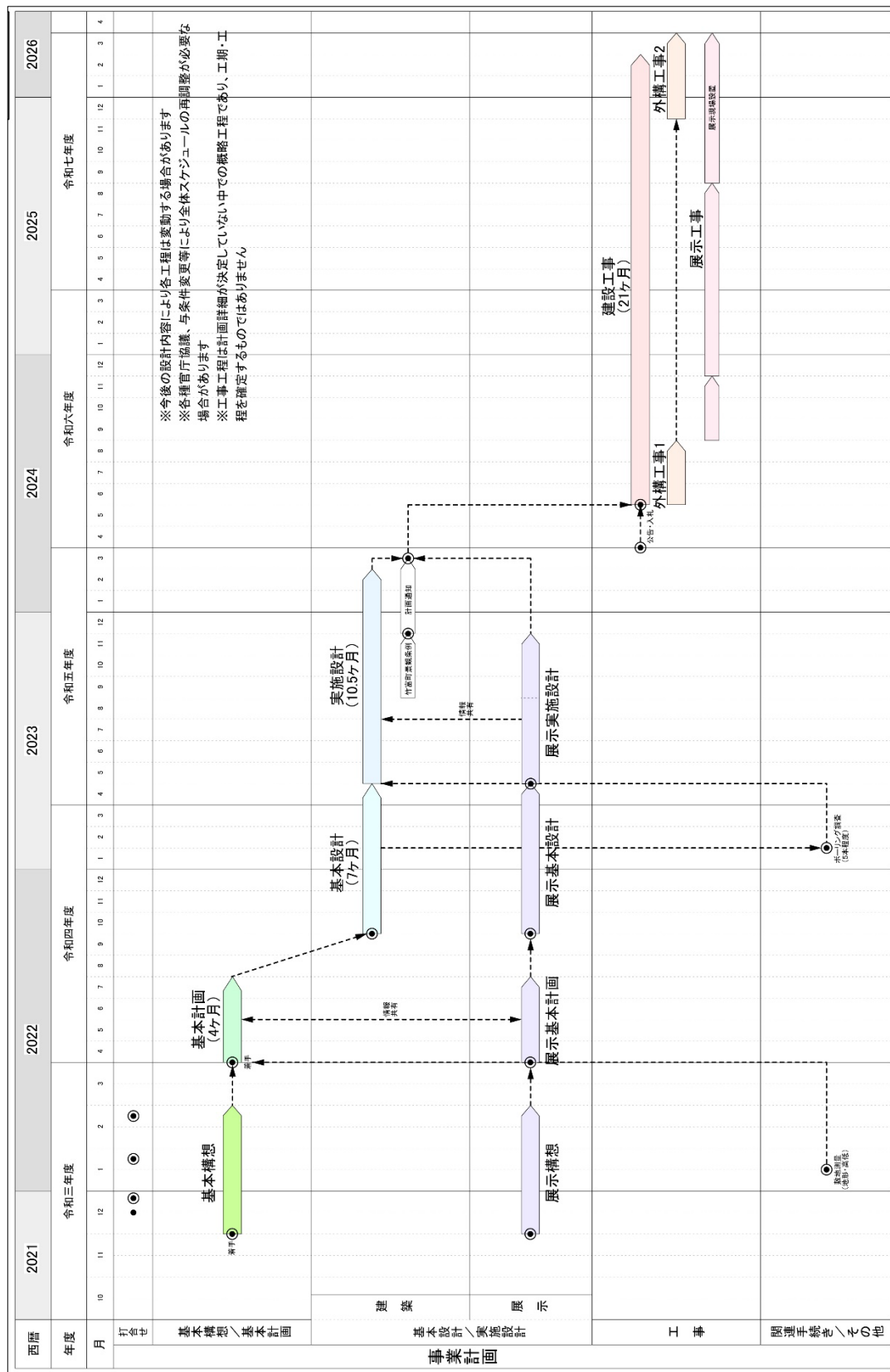
要がある点についても留意が必要である。

④ 同一敷地内の関連施設の整備計画との調整

- ・遺産センターの整備が予定されている敷地に関しては、ほぼ同時期に博物館、ホール、図書館といった施設の整備が計画されており、大原庁舎移転計画と合わせて、当該エリア一体の土地利用が大きく変化する。
- ・各施設の複合化や配置計画については、別途、本構想と同時併行での検討が進められており、世界遺産センター単独での整備検討とは異なり、関連施設との整備計画と十分な調整を図る必要がある。
- ・そのうえで、施設配置や複合化に当たっては、施設規模が周辺の自然景観や集落景観への影響に十分配慮し、離島らしい雰囲気壊さないよう慎重な検討が求められる。
- ・また、動線計画においては、他施設施工時の利用者と施工者動線の交錯、各施設への利用者動線だけでなく搬入動線についても考慮する必要がある。

3) 事業スケジュール及び概算工事費

(1) 事業スケジュール



(2) 概算事業費

本事業に係る基本計画、基本設計・実施設計、工事等の費用概算は以下の通りである。ただし、本事業は連携する他事業の進捗状況や事業敷地全体の測量・地質調査等の実施状況に応じて順応的に進めるものであるため、概算費用についてはこれらの状況を踏まえて変更となる場合も想定される。

【概算事業費（税込：千円）】

年度	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	2025 (R7)
建築	基本構想 4,950	建築基本計画 6,600 建築基本設計 19,580	建築実施設計 47,190	建設工事 596,000	
展示		展示基本計画 2,750 展示基本設計 5,500	展示実施設計 9,900	展示工事 268,270	
外構		外構基本設計 2,750	外構実施設計 6,600		外構工事 127,850
計	4,950	37,180	63,690	992,120	
事業費合計					1,097,940

※面積の設定

建築：970 m²、展示：500 m²、外構：0.5ha

※積算根拠

建築設計：「官庁施設の設計業務等積算要領」（平成31年1月改定版）

外構設計：「2021 ランドスケープコンサルタント業務における標準業務・報酬積算ガイドライン」

（一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会）

工事費は次頁参照

【工事費の算出】

令和4年度自然公園等整備工事予算単価より「博物展示施設（ビジターセンター）」を参照。

また、地域別工事費指数を国土交通省大臣官房官庁営繕部作成の「令和4年度新営予算単価」第1地域別工事費指数により、「沖縄県・八重山列島（石垣島を除く）130」を採用する。

ただし、当単価は自然公園内で建設される木造建築物等の、延べ面積1㎡あたりを円単位で示したものであるため、本計画の構造形式の選定においてはRC造も選択肢となるため、その際には規模検討が必要となる。

工種	数量	単位	予算単価	補正計上	補正単価	金額（円）	備考
建築工事	970	㎡	344,340	1.3	447,642	434,212,740	P2
地業工事	970	㎡	4,890	1.3*1.6	10,171	9,865,870	杭地業 地域補正+地震力補正
電気設備工事	970	㎡	50,540	1.3	65,702	49,023,800	P2
機械設備工事	970	㎡	50,620	1.3	65,806	49,101,400	P2
工事費小計						542,203,810	
消費税						54,220,381	
工事費計						596,424,191	

※建設工事費：令和4年度自然公園等整備工事予算単価（環境省）

及び「令和4年度新営予算単価」（国土交通省大臣官房官庁営繕部）による

展示工事	500	㎡				243,879,630	
Grade (A)	(65)	㎡			650,000	42,129,630	
Grade (B)	(330)	㎡			500,000	165,000,000	
Grade (C)	(105)	㎡			350,000	36,750,000	
工事費小計						243,879,630	
消費税						24,387,963	
工事費計						268,267,593	

※：展示工事費は、p51の展示のゾーニング及び整備イメージ（案）に従って、全体面積500㎡を整備水準(Grade(A)～(C))に按分して積算。整備単価は類似施設等の事例を参考に設定した。

外構工事	一	式				116,227,000	
工事費小計						116,227,000	
消費税						11,622,700	
工事費計						127,849,700	

※：外構工事については他事業との整備範囲、工事区分等が確定されていないため、世界遺産センター周辺のみを外構整備費を概算工事費として計上。

4) 管理運営方針

(1) 想定される事業活動

世界遺産センターにおいて実施する事業活動については、対象とするターゲットごとに実施すべき内容も異なることから、機能区分ごとに対象とするターゲットに向けて実施すべき事業活動を整理し、以下に示した。

機能区分	来訪者	島民・町民	不特定多数
展 示 解 説 機能	・来館者への館内解説の実施 ・修学旅行・学習型観光等で訪れた来訪者を対象とした館内解説プログラムの提供	・展示施設を活用した環境学習授業等の受入れ ・展示解説コンテンツを活用した出張授業の実施	・展示解説コンテンツのオンライン配信による普及啓発
体 験 交 流 機能	・西表島の魅力・価値を実感・体験するモニターツアー・アンケート調査・評価実験等の実施	・島民・町民を対象とした体験・学習型ツアー等の実施	・オンラインツアー等によるフィールドの疑似体験コンテンツの提供
教 育 学 習 機能	・来訪者への講習（特定自然観光資源への立入申請者・修学旅行・学習型観光等）の実施	・島民・島の子供たちの自然・遺産・環境学習の実施 ・観光事業者（観光案内人・登録引率者等）の研修等の実施	・西表検定等の教育学習プログラムの実施
案 内 サ ー ビス機能	・調査研究結果等の発表・専門家等による講演の実施 ・竹富町の島々と西表島の自然環境に関する図書・資料等の検索・閲覧		・開発メニューの広報・販売促進支援
	・世界遺産センターの施設案内 ・適正利用の仕組み・ルールの説明・案内 ・特定自然観光資源への立入申請受付 ・来館者への飲食・物販サービスの提供	・観光事業者・飲食店・宿泊事業者・農家・公民館等と連携したメニュー開発・販売企画等の実施 ・人材の雇用・育成・公民館等との連携・調整	
情 報 発 信 機能	・西表島の自然の魅力の発信 ・適正利用の仕組み・ルールの発信 ・特定自然観光資源への立入申請受付 ・遺産価値の保全管理に関する取組の発信 ・自然環境に関する調査研究データの発信		
保 全 管 理 機能	・保全管理活動の企画・運営・実施・参加機会の提供		
	・観光管理に関する普及啓発活動の実施	・島民・町民の保全管理に関する相談・問合せ・受入れ窓口	・保全管理への協力・支援の受入れ窓口
調 査 研 究 機能	・自然環境に関する調査研究の実施・データの蓄積・公開 ・関連機関・専門家等との連携・情報共有		

(2) 管理・運営の体制

① 管理費の確保について

世界遺産センターの管理運営は、竹富町が整備する施設であることから、施設の管理費に関しては、基本的に竹富町による予算確保が必要になるものと想定される。

しかし、将来に向けて安定した管理費を確保しつつ、竹富町の過大な財政負担とならないようにするためには、当該施設の主要な利用者である来訪者による資金負担の仕組みを確保することが望ましい。現在、竹富町及び環境省によって世界遺産や国立公園に対する利用者負担制度の導入に向けた検討が進められていることから、利用者負担の対象となる財政需要には、整備後の世界遺産センターの管理費も組み込んで検討しておく必要がある。

② 管理運営方式について

世界遺産センターは、遺産価値の普及啓発、保全管理の拠点施設という公益的理念の下で整備される施設であることから、センター施設の利用に関しては、無料での入館が基本となるものと想定される。しかし、本構想で示した世界遺産センターの展示設備の一部や、先に想定した事業活動の一部に関しては、収益事業としての実施が可能な設備や活動も含まれていることから、運営費用の一部を直接受益者から徴収することも考えられる。

世界遺産センターの運営の一部を有料としていく場合には、施設の管理運営を竹富町の直営とするのではなく、指定管理もしくは管理委託のかたちで地域の民間団体等との連携体制を確保することが望ましい。また、それにより、より質の高い、発展性のある運営・活動への展開も期待できる。

現在、西表島では自然環境の保全や文化継承、適正な観光管理の実現を目指す組織として「西表財団」が設立したことから、当該組織との連携による管理運営体制の構築についても検討が必要である。

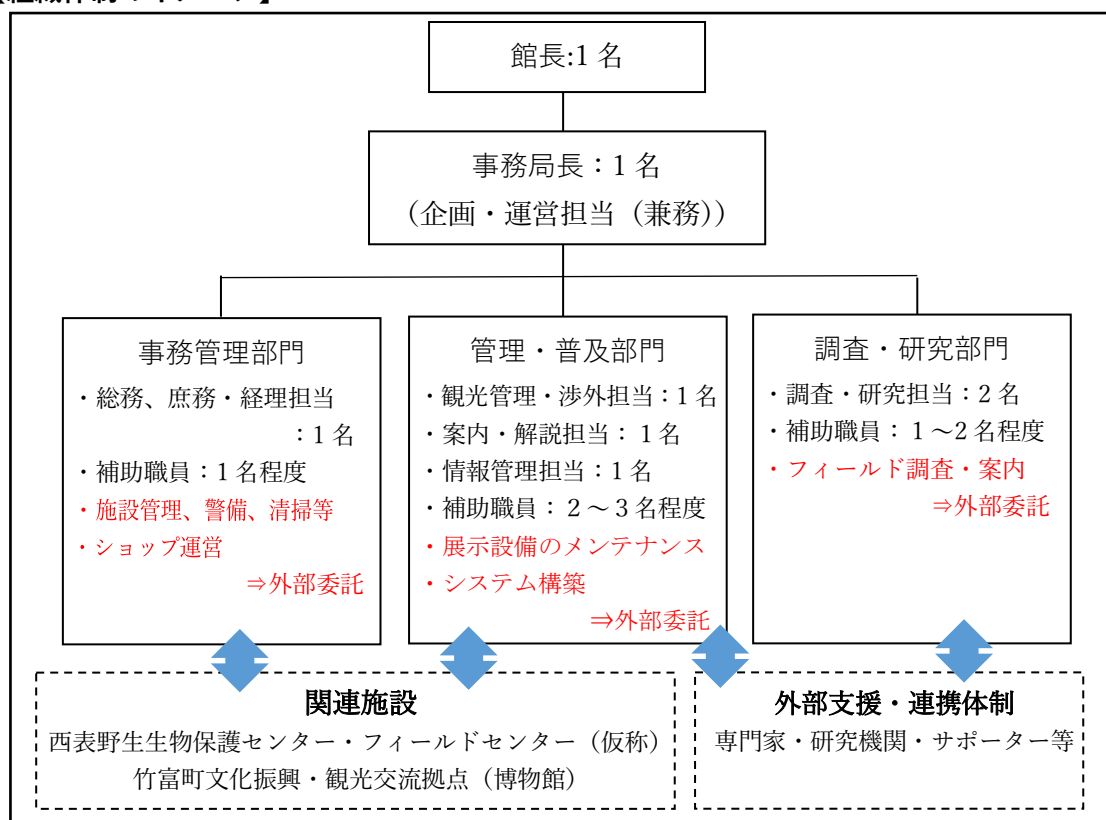
③ 必要人員の想定と組織体制のイメージについて

世界遺産センターの施設規模と事業活動から、施設の維持管理及び運営に必要な人員と組織体制を以下のとおり想定した。

【施設管理】		
事務・管理機能	・組織管理 ・総務・庶務・経理事務 ・施設保守管理（建物・外構等） ・施設警備、防災対策 ・施設清掃 ※外部専門業者に委託	館長 事務局長（企画・運営担当兼務） 総務・庶務・経理担当 各1名
【施設運営】		
展示解説機能	・館内解説等 ・企画展示の企画・運営・調整 ※展示設備のメンテナンス等は外部専門業者に委託	案内・解説担当 1名程度 +補助職員1～2による補佐 調査・研究担当（兼務）
体験交流機能	・フィールド案内 ※ガイド事業者・専門家等に一部委託	調査・研究担当（兼務）

教育学習機能	・立入受付・事務処理 ・研修会・講習会等の実施 ・情報管理・閲覧機器管理 ※専門家等との連携・協力及び一部委託	観光管理・渉外担当者 1名程度 +補助職員 1～2名による補佐 案内・解説担当（兼務） 調査・研究担当（兼務） 情報管理担当者（兼務）
案内サービス機能	・受付窓口 ・施設案内 ・企画・開発 ・関係者調整 ・飲食・物販等のショップ運営 ※企画開発等の一部・ショップ運営は外部委託	企画・運営担当（兼務） 観光管理・渉外担当（兼務） 案内・解説担当（兼務） +補助職員 1～2名による補佐
情報発信機能	・情報の収集・整理 ・データベース・システム管理 ※システム構築等の一部は専門業者に外部委託	情報管理担当者 1名程度
保安全管理機能	・各種活動・保安全管理事業等の企画・運営・調整 ・会議開催・運営事務局	企画・運営担当（兼務） 観光管理・渉外担当（兼務） 調査・研究担当（兼務） 情報管理担当者（兼務） +補助職員 1～2名による補佐
調査研究機能	・調査・研究の企画・実施・公表 ※専門家・研究機関等との連携・協力及び一部委託	調査研究担当 2名程度 +補助職員 1～2名による補佐

【組織体制のイメージ】



西表島世界遺産センター整備基本構想

令和4年2月

竹 富 町